

転生したらエリックだった件

逸般ピーポー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生（という名の憑依？）したらエリックだった。

神様からのせめてもの慈悲で前世の記憶持ちの新生エリック君、極東で頑張るってよ。

※作者はゴッドイーター無印、バースト、2のストーリーミッション程度しかやってないヌルヌルゲーマーです。ヒロインは多分ジーナさん。追記：リザレクション始めました。

ここ違うよ、とかのご指摘は順次確認次第修正します。  
なるべくそういうことはないように気を付けます。

思い付きかつ他作品の息抜きです。エタリます（多分）。エタリます（重要なことなので）。エターナルフォースブリザード！作者は死ぬ。

もつとエリック主役な小説よ流行りたまへ…！

## 目次

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 第1話                       | 1   |
| 華麗に                       | 4   |
| 墮王油3つ                     | 7   |
| さあ、出撃だ！アラガミが、勝利が僕を呼んでいるよ！ | 9   |
| 頼むよジーナ氏                   | 12  |
| ゆくぞエリック。素材の貯蔵は充分か？        | 16  |
| そんな装備でだいじよばない             | 24  |
| ジーナさんの日常                  | 26  |
| デート                       | 32  |
| メインヒロイン、登場！               | 38  |
| サツバツめいたアトモスファイア           | 42  |
| 戦士達の小休止                   | 46  |
| リツカちゃんと、エリックくんと           | 49  |
| 野郎オブクラツシャー！               | 56  |
| まず服を脱ぎます                  | 68  |
| 愛妹見舞                      | 74  |
| ロクデナシⅡ                    | 79  |
| バトルドーム！                   | 85  |
| ワニをしている                   | 88  |
| ぼるぐ・かむらん                  | 91  |
| しもんきん                     | 96  |
| 夏の日の思い出                   | 101 |
| 俺は詳しいんだ                   | 111 |
| ルツピョロ専用ヒギヨパム              | 124 |

強いモノ、弱い者

揺れる心、震える拳

雨

時雨

神の色

—

—

—

—

—

143 139 136 131 127

## 第1話

転生したらエリックだった件。

さて皆さん。神様転生というものをご存知だろうか。そう、二次世界では割りと有名なあれです。

例えばゲートオブバビロったり、成長限界無限だったりするあれ。Fateならだいたいサーヴァント指名とか。チートのような特典をもらえるあれ。

その転生をした。会話内容なんて冗長かつ誰得なので割愛。

転生特典？ねえよそんなもん。行く世界はゴッドイーター、アラガミ側か神機使い側どっちがいい？ってことでゴッドイーター側を選択。

そしたらせめてもの慈悲ってことで、一応前世の記憶だけは持つていっていいってさ。わーい。

：ゴッドイーター（無印）だったら記憶あっても最後の方が地獄なんですけどね。

ゴッドイーターは好きなゲームだったので、無印、バースト、2の全てのストーリーミッション（光ってるやつ）を終わらせる程度にはまっていた。無印の難易度10はマジで1つのミッションを終わらせるのに徹底的に刀身銃身防具の強化して、それでも10回以上失敗しまくったりした記憶が…。あがががが。

逆にバースト、2の難易度ならなんとかなるはず。いや、ゲンさん（神機が拳銃）みたいなものになってしまったら無印レベルの難易度だと思っただけ。人生ハードモード。まあゴッドイーターの世界に限らずとも人生はルナティックだぜ。なんて思う時もあるけどさ。

さて、そんな感じで気付いたら廃工場（鉄塔の森、だっけ？）。目の前には神薙ユウくんらしき人物。

え？

「エリック、上だ！」

転生したらエリックだった件。

「ハッ！」

ソーマの声を聞いた瞬間、バックステツポウ！

まだだ、まだ俺は死ぬ訳にはいかんだ！だって転生したばっかだし！

いや、エリックこと上田君になってんだから、これ憑依か？まあいい。なんにせよ…っ！

「ソーマー！」

背後にいるであろう、エリックの（つまりこの瞬間から俺の）友であるソーマに頼る。だって俺の手にある神機はプラスチックだし。弾はモルター（爆発系）しかないから、撃てば自分がぐあああ！ってなる。…後で脳天直撃弾と内臓破壊弾、作れたら作っておこう。あとプリティヴィーマータの肩破壊用にプリティガン。出来ればメテオも作りたい、が…。あれはゴツドイーター2からだったかな？望み薄か。

なんてのんきになっている間にソーマきゅんがオウガテイルを倒してくれた。きやあああ、ソーマきゅんかっこいいー！無印ではマジで主人公してましたね…。あれは惚れるわー。ソーマきゅんマジ主人公。

ソーマきゅんが肩にノコギリ（神機）担いで新入りに向き合ってる。あのセリフ聞けるか？

「ようこそ…。クソツタレな職場へ…」

きたあああああ！

ゴツドイーター2のソーマも好きだけど、やっぱり俺はこっちのソーマが一番ソーマらしくてかつこいと思うんだ！生クソツタレな職場頂きましたー！

ソーマったらマジイケボ。低くて聞き取りにくいのが難点だけど。

「とりあえず、助かったよソーマ」

「ぼさつとしてんじゃねえ…」

不機嫌そうに呟いて背中を向けるソーマ。うーん、実にクール。だが、エリックの記憶がある俺には分かる…！

あれは、実は半分照れ隠しなんだと！

俺とユウくんをその場に残したままのしのし歩いて行くソーマ。

こうしていても仕方ないので、ユウくんに声をかける。

「さて、僕達も行くか」

## 華麗に

あの子のミッションはソーマの攻撃力の高さで神薙ユウくんの新機としてのポテンシャルの高さもあって、無事に終了した。

しかし、ユウくんを見ていると、なんとなくバーストの頃の自分のキャラクターを思い出す。

水色の髪。ヘッドホンで人の話を聞いているのか分かりやしない頭。ホーネットパーカーにレンジャーブルーマスの女キャラだった。ゴッドイーター2ではレンジャーブルーマスの存在が無いとは思わなくて、結局最後までミッションを終わらせてからパソコンで調べてショックだったなあ…。メテオもその時に知ったから、実はメテオの使用回数は数える程しかないんだよね。

無事アナグラに戻ってきた。

原作ではこの時点で既にエリックこと上田君は死んでいるので、確かにある意味転生と言えなくもない。神様転生○。憑依の間違いじゃないかなあ…。

さて、これからどうするか。

たしかこれからあれでしょ、リンドウが行方不明になりアラガミ化。

第一部隊は隊長にユウくん、そしてサクヤさんとロシアの…ええと…そう、アリサだ。アリサ・イリーニチナ・アミエーラ…だっけ？

サクヤさんとアリサたんがエイジス島に不法侵入、コウタくんが男見せて吉幾三！違う、よし、いくぞ！ってなって皆で支部長フルボッコ。ちなみに無印で逆にフルボッコにされたのは私です。封神付きのロングブレードは覚悟が無くて、ガードしても死ぬんだよ…。あれは虚しい。

それ以降、私のお供はシユウのホールドショートにグボロのタワーシールドになりました。展開速度アップ付きのタワーシールドは本当に便利。でも死ぬ。特に難易度10。ふざくんな。



さて、このまま行けば多分リンドウが行方不明になる。リンドウさんは第一部隊どころか、アナグラの中でもトップクラスに失いたくない戦闘力だ。しかしこのまま行けば、アラガミ化する上にアナグラからどっか行ってしまう。

そして主人公とレンきゅんと共にイチヤイチャラブラブ（血みどろの戦場で暴れまくり）、ごきげんチュッチュ（アラガミ捕食）するのだ。主人公だったからマジで戦場デートだと思いました。バーストだけだっけ？あのストーリーは。

それはともかく。

リンドウさんを失うのは、歩く死亡フラグエリック君にとっては非常に避けたい。エリックがいつ追憶のエリックになるか分からない以上、徹底的に私は死なないように生存率を上げたい。

というわけで、困った時のスターゲイザー。僕らのドラえもん、ペイラー榊博士だ！

どうでもいいけど、最初ペイラー博士が絶対黒幕だと思いました。怪しいよね。怪しくない？きつとそう思ったのは私だけじゃないはず。でも実際裏切るのは支部長。オンドウルルラギツタンディスプレイカー！

「というわけで博士。万が一アラガミ化した時に、アラガミ化を押し返せる薬を作ってくれないかい？」

「何が『というわけ』なんだい？」

ラボラトリ。

部屋の中央には博士があのおくわからない微妙なデザインの子エック柄のぶかぶかズボンを履いて座っていたので、早速リンドウ助けちゃおうぜ大作戦（今命名）のために必要な薬を調達。ほら早くよこせよ（横暴）。

博士はため息を一つつくと、諦めたように話始めた。おうあくしろ

よ。

「はあ…。ええと、アラガミ化をなるべくゆっくり進行させる…。言うなれば、抗アラガミ化進行薬とでも言うべきものを作ってほしいのかい?」

「ああ」

無論だ!

「ううん。確かにアラガミ化の進行を押さえる薬のアイデアはあるんだ。だけど、今の手持ちでは材料が足りなくてね」

そう言つて博士はこちらを向くと、いつものあの胡散臭い笑顔を向けた。

「とりあえず、墮王油を3つ集めて欲しいんだ。

…頼めるかな?」

ちつくしよおおおお! やっぱりお使いかよおおおお!

しかも墮王油だと? 3つだと!?

けっこうあれ出にくいんですけど! ふざけんな!

しかし体はそんな感情とは裏腹に、勝手に答えていた。…髪をかき上げながら。

「ふっ。この僕、エリック・デアⅡフォーゲルヴァイデに任せてくれたまえ。その程度、華麗に集めて見せるよ」

「…頼んだよ」

そして勝手に格好を付けながらラボラトリを出ていく俺(の体)。

やめ、やめろおおおお!

## 墮王油3つ

「はあ…」

勝手にこの体（エリック）が受け答えをしてしまったせいで、博士からのお使いで墮王油を3つあつめることになってしまった。

いや、まあアラガミ化の進行を押さえる薬の制作を頼んだのは俺なので、ある意味自業自得といえればそれまでなんだが。

…しかし、墮王油か。

墮王油。

クアドリガの墮天種から落ちる。部位破壊しなきゃダメなんだつたかな？もう覚えてねえよ…。

つか、難易度どれくらいまで現状受けれるんだろう。ヒバリちゃんに聞いてみよう。

「ヒバリ嬢」

「はいーあ、エリックさん！どうされました？」

「今受けられる任務を教えてくださいんだが…」

「はい、ええと…。今は危険度6までの任務を受けます！危険度6の任務を表示しますか？」

…危険度？なんぞそれ。

と思ったので、とりあえず見せてもらう。ふむふむ。

- ・ ヴァジュラ2体の討伐
  - ・ ウロヴオロスの討伐
  - ・ ヴァジュラ1体、シユウ1体、荷電性シユウ1体の討伐
  - ・ 墮天種クアドリガの討伐
  - ・ 極地適応型のコンゴウ2体、およびグボロ・グボロ1体の討伐
- e t c . . .

わかった。危険度6ってゲームでいう難易度6だ。

その証拠に、報酬部位に獣神雷毛とか混沌爪、混沌苔、墮王鎧や墮王砲がある。

けど、たしか難易度6はプリティヴィマータさんとかもあつたはずなのだが…。マータさんの名前が見当たらない。まだ未発見…つてことか？シナリオの时期的に考えて。

オーケーわかった。とりあえず、バレットの編集をしてから誰か一緒に行ってくれる人を探そう。

「…ありがとう。また後で来るよ」

「かしこまりました」

ヒバリちゃんにお礼を言って戻ることにする。

向かうは…ターミナルだ。

面どつちいので出撃用ゲートの隣で。ていうか、ゲーム内でわざわざ自室のターミナルを使うのはシナリオの時くらいしかなかったし。

さて、まずは弾は編集。お金がけっこう吹っ飛んでいくけど、炎、氷、雷、神の4属性を作る。内臓破壊弾も脳天直撃弾も、ゲームではスナイパー一筋だったからオラクルポイントが少し少なくすんできた(はずだ)けど、ブラストとか無印とかバーストの時代では初めてだぞ…。そもそもこれ、撃てるのか？

かすれかけているうろ覚えな記憶を頼りに、なんとかそれっぽい弾は完成。内臓破壊弾、脳天直撃弾、プリティガン。内臓破壊弾は4種、脳天直撃弾も4種、プリティガンは炎と氷の2種。プリティガンは炎だけだと、破壊前に死んじゃったりするから念のため。ゲーム時代まんまとも言う。しかし値段たっかい…。ゲームでもお金かかったっけ？覚えてないな…。

あ、ブラストでも全部撃てた。ただ、内臓破壊弾は確かスナイパーだと3発撃てたはずなんだけど、ブラストだと2発しか撃てない。…銃オンリーって、どうやってオラクルポイント回復するのん…？あれか？アイテムだけ？

…え？正気？

さあ、出撃だ！アラガミが、勝利が僕を呼んでいるよ！

とりあえずバレットは準備できた。あとは誰を誘うかだが…。

俺が後衛なんで、もう一人は後衛が欲しい。…ジーナ氏を誘おうか。俺、実は無印時代はからジーナ氏の大ファンで。ゴッドイーター2で大バカノンとかいう女キャラのエピソードはあったのにジーナ氏が見つからなくてがっかりした記憶がある。誤射姫は絶許。毎回ミッション終了後に徹底的に撃つていたのは今でも覚えている。あの時ほど味方の体力を減らしたいと思ったことはない。

知ってるか？バカノン、極東支部はおろか、世界中に点在する全支部の中でも最高の誤射率を誇るんだぜ。誇ってんじやねえよ。貶される。ふざける。爆死しろ。あれは公式も悪い。カノンは存在が人類悪。

キャラクターは嫌いじゃないけどさあ…。

しかも言うことが

『射線上に入るなって、私、言わなかったっけ』  
だろ。

それから俺はカノンだけはリンクエイドしなくなった。

あれは敵。敵なの。アナグラの中でのみ味方。

あとは前衛が欲しいな。いつもならソーマに頼むところなんだけど、どうも居ないようだ。他を当たろう。

…この時期だと特務かな。

なんて思っていると、あり得ないはずの顔を見た。

待て。何故お前がここに居る。いやおかしいだろ。

偉大なる探索者。

真壁、ハルオミ。

真壁ハルオミ。

ゴッドイーター2に出てくる人物で、ゴッドイーター2の時点から5年前、グラスゴー支部で愛する女性を失った。

確かゴッドイーター2は無印・バースト時代の3年後か何かなので、今から2年前に…つまり、すでに死別した後だということになる。

飄々とした男性で、個人的にはゴッドイーターシリーズの中でも屈指のギャグセンスを持つ人物だと思う。どこか憎めない愛嬌があり、事実、女キャラでプレイしていたゴッドイーター2でも、毎回頼みごととは断っていたが常に違う女性キャラを連れてくるほどのナンパ師であった。ミッション終了後に思っていたことは、おうこんなかわいい女の子(プレイヤーキャラクター)と(戦場)デート出来るんだから感謝しろよ。

エピソードが楽しかった上にわりと紳士だったところが非常に好感が持てる。

しかし…。ハルオミ。お前、まだアナグラにいちやダメだろう…？なんて思っていたが、彼はこちらを認めると気軽によう、なんて片手をあげながら話しかけてきた。いや、なんでいるんですかあんだ。「ようエリック。どこか行くのか？」

「あ、ああ…。ジーナ氏を誘って、クアドリガの墮天種の討伐に行こうかと考えている」

そう言った時、ハルオミの目がキラリと光った。

(☆▽☆)

「ほう…。いいねえ。…ところでそれ、俺も混ぜてくれない？」

彼はゴッドイーター2では確かバスターブレードにスナイパー。今はまだ新型化されていないはずなので、バスターかスナイパー…。どっちだ？

「…その前に、ハルオミ氏。ハルオミ氏の神機はバスターだったか？」

「あん？そうだぜ。なんだ、バスターじゃダメだったか？」

大歓迎だ。

「いや…。むしろ、前衛を探していたところだ。ジーナ氏に聞いて、問題なければ行こう」

「任せろ」

そう言って、にやつと笑って小さく拳をこちらに差し出してくる。  
ふっ。この男は、これだから嫌いじゃない。  
そう思いつつ、俺も握り拳を軽く当てた。

## 頼むよジーナ氏

ジーナ氏の姿はロビーには無かったので、ベテラン区画と呼ばれるエリアへ。

ゲームでは基本的に禁止区画とされ、中盤以降自室が元リンドウさんの部屋になっても大体禁止区画のままというあれである。ていうか、ゴッドイーター無印・バースト時代は大体行っても入れない貴重な部屋だったりする。

アリサの部屋に入って汚なっ！って思い、そして次にパンツ！パンツです！ってなったのはきつと俺だけじゃないはず。あれ、パンツあつたっけ…。靴下（ニーソ？）はあつたはずなんだが…。

まあいい。

それはともかく、とりあえずジーナ氏の部屋へ。

ゲームと違い、寄宿舎らしく個室がいくつもある。男女で分かれたりしてないのが現在の世紀末っぷりをよく表している。なぜかつて？ころころ人が変わるからね。仕方ないね。ポンポン人が死ぬ世界ですし。無印はよく死んだなあ…。

コンコンコン。

ドアをノック。

「…誰」

「私だ」

「…誰？」

本当に分からなかったようで、マジトーンで聞き返されました。ごめんちやい。

「僕だ、エリックだ」

「…」

しばらく待っていると、今まで寝ていたのか、寝ぼけた感じでジーナ氏が顔を出した。

「…何の用？」

「ミッションに同行を頼みたい」



うはー！生ジーナたんキタコレ！

寝坊助まなごを（ごしごし）こするジーナ氏とかこれ可愛すぎじやないっすかね常考！拙者、思わずキャラが崩壊するほど天元突破してま  
すぞおおお！

んんwwwこれはジーナ氏たんしかありえないwww

…はっ！お、俺は何を（ry

「…何の」

「クアドリガ墮天」

「…少し待ってて」

そう言っつてジーナ氏は部屋に引つ込んでしまった。

いや、少し待っててつてことはこれオツケーなパターン？マジで？

…やったぜ。

完全勝利UC。…あ、ハルオミ氏のこと伝えそびれた。

ドアの隣で体育座りして待つことしばし。多分10分くらい。ガチャツと空いたドアからは、いつも通りのどこかダウンナーなジーナ氏の姿が。うーん、かっこいい。

「で？他は」

…他？ああ、メンバーかな。ハルオミ氏が何故か来ます。

「僕とジーナ氏、あとハルオミ氏」

「…なんで居んの？」

「前衛」

「…ま、いいけど」

あ、ちよ、待って下さいジーナ氏い！

スタスタ歩くジーナ氏の背中をあわてて追いかけ、ロビーに出る。するとそこには、誤射姫と話をしているハルオミ氏の姿が…。

「おっ、エリック。その感じだと、オーケーもらえたのか」

「…ハルオミ氏。何してた？」

「ああ、カノンちゃんがミッション行きたいっていうからさ。…代わりに頼む」

は？

とか思っている間にハルオミ氏は俺の背中をぐいぐい押ししていた。あ、ジーナ氏がため息ついてる。でもちゃんどついて来てくれてるあたりポイント高い。小町ポイント…死んだ目…うっ。やはり俺の殺伐ラブコメは間違ってる。

「あれ？エリックさん？」

「やあ」

よう誤射姫。

「あー、すまん。すまんが、俺は今からエリック、ジーナと一緒にミツシヨンに行くんだ。だから、カノンちゃんには悪いが、一緒にミツシヨンには行けねえっつーか…」

「え？そうなんですか？」

「…ああ」

くそ、バカハルオミ氏。三人ならまだあと一人行けるんだよ。なんてタイムリーにバカなことをしてくれる…っ！

これで私も連れていって下さい、なんて言われたらどうすんだ。…いや、まだ間に合う。無理やり会話を打ち切って、さっさとミツシヨンへ行くんだ！

「そういう訳だから、これで失礼する」

そうやって足早にカウンターに向かい、さっさとミツシヨンを受注する。

あの…！なんて言う声は見ざる聞かざる話さざるの術。あーあー聞こえな…い。

ささっと準備を終え、ジーナ氏とハルオミ氏を伴って出撃ゲートへ。

ゲートに入った瞬間、ふう…と胸の息を吐き出した。

「…あれで良かったの？」

そうジーナ氏が聞いてくるも、彼女も止めなかったあたり分かっているのだろう。誤射姫のあだ名は伊達ではないことを…！

「…ハルオミ氏」

「うっ…」

そう。諸悪の根元は（今回は）ハルオミ氏だ。ゆえに、ハルオミ氏に全責任を被って貰おう。頑張れ。

え？助け合い？知らない子ですね…。

はあ…。なんて肩を落としているところ悪いが。

「ちなみに墮王油がっつ落ちるまで付き合ってもらおう」

「マジかよ!?!」

ゆくぞエリック。素材の貯蔵は充分か？

俺がエリックこと上田くんになってから三日後。

なんとか3つの墮王油が集まった。

かかった期間：3日。

累計出撃回数：46回。

いやー、難易度6のクアドリガ墮天がここまで強敵になるとは…。

まず、エリックの所持していた神機がそもそもこれ。

『20型ガット』

ステータスをご存知？こんなんだ。ちなみによろず屋さんで購入可能。もうこの時点で勘のいい人とホモの皆さんはお気づきだろう。クソザコナメクジそのものであると…。

ステータス

破碎：×1.50

貫通：×1.00

炎：×0.50

氷：×1.00

雷：×1.00

神：×0.50

スキル

なし

おかしいでしょ。おかしくない？

いやね。そりやあまだ時期的にはまだ序盤も序盤ですよ？でもさ。アリサちゃんは初っぱなからレイジングロアとか使ってたし、コウタくんもモルスイブロウ（だっけ？）とか使ってたし、ソーマも確かランク7の黒ノコギリでしょ？

なのになんなん？ランク1の、しかも最初から買える一番弱いであろうブラストですよこれ。ふぎくん。エリックうー！お前これは死んでも仕方ないぞ！

…はっ。まさか、開発が死ぬキャラだからって手抜きした可能性が

微レ存…？これは許されませんねえ…！

一回行つて15分近くかかったうえ、20回くらいくたばつてリンクエイドしてもらつたことで、さすがに強化しました。

よろず屋さんで購入と売却を繰り返して財布を分厚くし（あのバグはなぜかそのままだった）、よろず屋さんの顔が白くなるのと反比例するようにお金持ちに。

そして十分に資金を貯めて、低難易度のミッションで低強度工具鋼を合計6つゲット。

既によろず屋に鬼牙・荒爪が売つていたので、鬼牙を4つ、荒爪を3つ、それぞれ購入。

そして、20型ガットに鬼牙4つ、低強度工具鋼を4つ、125f cを支払つて20型ガット改に。

そしてそして、20型ガット改に荒爪3つ、低強度工具鋼を2つ、130fcを支払つて20型ガット真へ！

ちなみに20型ガット真のステータスはこんな感じ。

破碎：×1.50↓×2.30

貫通：×1.00↓×1.30

炎：×0.50↓×0.50

氷：×1.00↓×1.70

雷：×1.00↓×1.90

神：×0.50↓×0.50

スキル

スタミナ←小

ノックバツク距離←小

…。

炎、強くなつてないね。

しかもスタミナ←まで付いたよ。へへ…。

ふざけんな！つてことで、リツカちゃんに聞きに行つたんだよ。神機変えたいつて。

そしたらね。

神機変えても、適性ないから扱えないよ？って聞き返されました…。

いや、しかしまだ希望はあるはず！そんな思いでもう一度だけ適性の検査をしてほしいと頼み込み、一日目の終わりに検査してもらったんだけど…。

(二日目のこの時点でクアドリガ墮天は15回倒して墮王油1。15回目ようやく)

返って来たのは残酷な現実だった。

『うーん…。やつぱり、今エリックが使ってる神機以外には適性ないね。今持っている神機と、もつと深く付き合ってあげて？』

俺はベッドに突っ伏して泣いた。

二日目。

今さらながらに気づいたんだけど、どうやらこの世界はバースト時代っぽい。いや、リザレクションやってないからもしかするとリザレクションなのかもしれないけど、無印ではないようだ。

理由はジーナさん。

当たり前前に思ってたから気付かなかったけど、無印時代のジーナさんはたしか帽子を被ったパツキンのナイスバディのチャンネー(死語)だったはず。

しかし、今俺の前に居るのは慎ましやかなお胸にサラサラの銀髪ショート、左目に眼帯をしたバースト時代のジーナさんである。ファンです(建前)結婚してください(本音)。

嘆きの平原などと言ってはいけない。死ぬ。

ちなみに昨日死にまくったおかげか、今日はあまり死なない立ち回りが出来た。もちろんそれはタイムの短縮と効率アップに繋がって良いことなんだけど…。

ジーナさんにトントンってされながら

「ほら」

って言ってもらうことも減っちゃった(・ω・)

ジーナさん、もつと俺に触ってくれてもいいのよ？

余談だが、実はジーナさんよりもハルオミ氏に助けてもらう方がちよつと多い。体感でジーナ氏4：ハルオミ氏6。ハルオミ氏に触られても嬉しくねーんだよオラア！

…でもハルオミ氏なので許す。はっ。これが人徳というやつか…。どうでもいいけどリツカちゃんはやっぱり可愛かったよ…。リツカちゃんは可愛い。可愛い。何故二回言ったし。大事なことなので  
(ry

ちなみにジーナ氏に

「ほら…頑張つて」

なんて言われた日には俺の気分が天元突破、有頂天に達するのは火を見るよりも明白である。

ちなみに本日の戦果。

クアドリガ墮天15回倒して墮王油1。

今回は14回目が出たので、次は13回目で出るといいなあ…。

一回あたりは相変わらず10分以上かかっている。

…ジーナ氏に脳天直撃弾と内臓破壊弾をプレゼントしようか？お金(f.c.ウエンリルクレジット)はよろず屋さんで増やせるし…。効率上がるし。

…よし。そうしよう。

そうと決まれば早速バレットエディットを開いて…。

カチャカチャ。

カチャカチャ。

ビシューーン。

出来た。

さて、早速ジーナ氏にプレゼント…。って、あれ？

おかしいな。ミッシュョンが終わって戻ってきてからさつきまでロビーに居たはずなんだけど…。

仕方ない。ヒバリさんに聞こう。

「ヒバリ嬢、今構わないだろうか」

「はい。あ、エリックさん」

「先ほどまでジーナ氏が居たはずなのだが…。どこに行ったか知らない

「いかい？」

「それでしたら、自室に戻ると言っていましたよ？」

「すまない」

そう言うのと、ヒバリちゃんはふふっ、と楽しそうに笑った。なんか変なこと言ったか？

「あ、すみません。ただ、ジーナさんはエリックさんのことをよく分かっているんだなって」

「？」

「どういうことだ？」

「先ほどジーナさんは、私にこう言ってきたんです」

『エリックが私の居場所聞いてきたら、自室って言うておいて』

「…って」

「ああ…。そういう…」

そんなに俺って単純だろうか。…いや、ミッションで何回もリンクエイドされてれば、そりゃ単純か。なんだか複雑である。

ジーナ氏に理解されてるのは嬉しいが…。ううむ。

まあいいや。

「とりあえず助かったよ。ありがとう」

「はい」

そんなわけでカウンターに背を向けて、ジーナ氏の部屋へ（二回目）。

うーん、ジーナ氏の部屋に俺って縁があるな。うはー！

拙者、正直ワクテカが止まらないでござるう！もしかしてこれいけんじゃね？じゃね？

ジーナ氏の部屋の前に着いたので、気持ちを切り替えて深呼吸。ふう。

さすがにさっきのテンションは自分でもちよつとどうかと思った。でもこの胸の内から湧き出るパトスを、抑えきれないんだっ！

トントントン。



「…誰」

相変わらずのジーナ氏の声。個人的にはこういう落ち着いたクールで美人な声って大好きです。結婚したい。結婚しよ。

「…私だ」

「…空いてるよ」

え？マジで？今ので分かったの？

…って思ったけど、そういえば昨日もこのやりとりやった気がする。そりゃ分かるか。他にもバリエーションを増やさねばな…。

「失礼する」

正直女性の部屋に入るのは緊張する。

ましてや、俺（エリックの中の人）が大々大好きなジーナ氏のお部屋である。

ジーナ氏は一人暮らししてたこともあるから（公式）身の回りのこととは出来るだろうし。甘いものが好きらしいから（公式）カノンこと誤射姫とも仲が良いらしい。

そんなジーナ氏のお部屋である。

…え？ジーナ氏について詳しいって？

またまた、ご冗談を。これくらい、ジーナスキーには当然のレベル、いや常識まである。そうであろう、同士諸君。

部屋に入ったとたん、ふわっ…と僅かに香る花の香り。…あ、これいつものジーナ氏の匂いだ。思わずばれないように深呼吸してしまう。これは良いものだ…。

「やっぱりエリックか…」

そう言ってきたのはこの部屋の主、ジーナ氏。

彼女はベッドに片膝を立てて座っていた。

ただ、なんだろう。その、ハア…。とても言いたげな顔は。失礼な。

いや、正直ジーナ氏にならなにされても気にならないんだけど。

むしろ今ジーナ氏が座っているベッドになりたい。おいベッド、そこ代われ。

「ああ。明日もクアドリガ墮天に付き合ってもらおうことになりそうだし、少しばかりのプレゼントを持ってきた」

「…プレゼント?」

?

という疑問符が彼女の頭に幻視できるくらい、何言っただこいつ、という表情が手に取るように分かる。ジーナ氏って分かりやすいよね。なお、ハルオミ氏には共感を得られなかった模様。

ジーナ氏といい、ソーマといい。割と分かりやすいと思うんだけど…。

とりあえず、彼女にプレゼント(脳天直撃弾4種&内臓破壊弾4種)を渡す。毎回ミツシヨン後に

『撃ち足りない…』

とか言ってるし、喜んで貰えると思うけど…。

そう思っただジーナ氏の反応を伺うと、なにやらじつとバレットを見つめている。

やがて、じーつと見つめた後に顔をあげてこちらに質問してきた。

「…これ、あんたが作ったの」

「ああ」

せやけど。

それがどうかしたかな。

せやかて工藤!…服部は関係ないね。

やがて彼女はふーん、と言っただからぼそつと小さな声で呟いた。

「…ま、もらつとく」

そう言うジーナ氏の表情に変化は見られなかったが、まあ、嫌がられてはいないようなのでよしとしよう。

「お気に召したなら良かったよ」

「…で、用件はこれだけ?」

「ああ。では、失礼する」

そう言っただ、俺は軽い足取りで彼女の部屋の匂いを思う存分に堪能しながら出た。いっただ。

自室に戻っただから、ジーナ氏の自室に入れたことに興奮して

イヤッホオオオオオウ!と叫んでしまったは、まあ、仕方のない

ことなのだ。

そんな装備でだいじよばない

さて、無事に墮王油が集まったところで、あの胡散臭いことで有名なペイラー博士の元へいつてきますた。

あと必要な素材は獣神雷毛16個と雷騎針3個。

いやー、これ新型なら楽勝なんだろうなー(ゲーム視点)。マジつれーわー(エリック上田君視点)。

ていうか何気に獣神毛じゃなくて上位素材な件。そのうち氷紋鎧とか要求されそうですねえ…。なにそれ怖い。

はよう武器を強化しまくってひゃっはー!虐殺だー!といきたいところなんだけどね。それまでにリンドウが死亡認定されそう。なんとかりンドウのMIAまでに、アラガミ化を抑える薬を博士に作ってもらいたいところ。そしてそのためには俺が必死こいてミツシヨンに行きまくりんぐするしか無いわけで…。

くっそ、オオグルマとかいうビッグダ○イみたいなやつにも何かしら妨害をしたいところだというのに。身体が足りない…!ちなみに命もいくつあっても足りない。難易度基準は無印でした。オデノカラダハボドボドダ!

さて、そんな訳で。今日も今日とて元気にアラガミ狩りです。

今日のお供は俺が大好きジーナさん。ジーナさんは最近基本的に俺と組んでくれることが多い。愛してます。

あともう一人はオペレーターのヒバリちゃん大好き野郎こと大森タツミ。何気にリンドウとかと同じくらいなので、ゴッドイーターの中では年長者ということになる。それゆえか、いさかいの仲裁や意見の対立時にはよく場を収めている。今日はしばらくしたら防衛班に出動らしく、途中までの参加である。

タツミさんが抜けた後は、誤射姫こと大バカのんちゃん(台場カノン)か小川シユンの二人しか候補が居ない(第一部隊は出撃中)。

ま、そんな訳で途中からはシユンと共に今日のミッションに行く感

じである。え？誤射姫？あいつは俺の中では敵だからアウト。今でもあの『射線上に立つなって、私言わなかったっけ』は許さない。俺は一度たりとも貴様の射線に出たことはない（ゲーム時）。毎回常に貴様が俺の背後に来るんだよ（ゲーム時）。

さて、今日のミツシヨンはおつきな猫公ことヴァジユラをフルボッコにすることです。獣神雷毛16はちよつと多いが、まあ1日でなんとかなる量でしょう。運が良ければ。

問題は、難易度無印ということだ。いやあ、シールドがないと（リンクエイドされるのが）はかどりますねえ！

はかどってちやダメなんだが。まあこればっかりは仕方ない。盾なしとか最弱バツクラーつけてるよりも紙装甲な訳ですしおすし。

ふふふ、俺はやるぜ…！

まあ真になっても火は0.5倍のままなんですけどね。ぎっこ。

## ジーナさんの日常

最近、エリックが変だ。

そう思うようになったのはしばらく前のこと。新型くん、ああ、神羅ユウだっけ？そっちね。

新型くんが来てすぐくらい頃からかな。

それまでエリックのことなんて気にしたこともなかったし、直ぐにこいつも居なくなるんだろうなんて思っていた。

それまでのエリックは、ヘタレすぎてバレットの届かないところから撃つてたり、あまりにも実戦力にならない神機（20型ガット）を『僕の魂！』とか言っていたし。いや、正直あんたの魂足手まとい以外の何者でもないから。そんなことを思っていた。

実際、出撃しても『ひい！』とか言つて、攻撃範囲の外に居るくせに回避ばかりするし。

それと、死神。

アナグラの中では知らない人なんていない。

ソーマ・シツクザール。

彼とエリックは仲が良い。いや、正確に言うならエリックがソーマに気さくに話しかけている、というべきか。どれだけソーマが冷たくあしらっても、さして気にした様子もなく接している、変な奴。

私自身はソーマに対して特に思うことはない。嫌いということもないし好きでもない。だから別に、エリックがどうしようと気にしたことはなかった。

それが突然変わった。

いきなり私にミツシヨンの勧誘をしてくるようになったし、戦い方も変わった。

突然墮王油を集め出したり、博士の元に通うようになったり。

戦い方も、これまではヘタレかつ役立たずそのものだったのが、いきなり近・中距離の間合いで動くようになった。あんたは近接戦でも挑むつもり？

そう思っていたら案の定、何度も何度も『うわーっ！』とか言いながら吹っ飛ばされたり死にかけたり。段々途中からリンクエイドに行くのが面倒になった記憶がある。

ただ、それから何度か戦ううちに遠距離く中距離での間合いに落ちて着いた。

それだけじゃない。それまでは『僕の魂だ！』とか頑なに言ってた神機をボロクソに言うようになった。と言っても、貶すような意味じゃなくて。このままでは生き残れない…！という感じ。

どういう風の吹き回しかと思っただけど、神機整備のリツカの元に行って適性の検査を頼んでいたらしいし、本当に何があつたのやら…。

あと、弱点属性や部位破壊に詳しくなった。

それまでエリックがそんなことを気にしたことなんてなかったのに、突然正確に弱点属性のバレット使用と部位破壊をするようになった。

しかも少しづつ勉強したとかじゃない。本当に突然、人が変わったんじゃないかと思うくらい正確になった。

下手したら、今は私よりも正確にスナイプ出来るかもしれない。使ってるのは相変わらずブラストだけど。

そのくせ相変わらずソーマとは仲がよかったり、トイレを詰まらせたりする。神機や戦闘のこと以外は相変わらず。変わったんじゃないかと思つたら、いや実は気のせいじゃないかと思うようなことをするし。

…この間も、防衛班の男連中とカウンターの前で馬鹿な話をしてたし…。

大森タツミ(以下タツミ)「だから！ヒバリちゃんがここで一番魅力的に決まってるんだろ！いい加減にしろ！」

ブレンダン・バーデル(以下ブレン)「そう熱くなるなって……。実際、ヒバリちゃんだけじゃなくて極東支部の女性は魅力的な人たちばかりだと思うよ。エリックもそう思うだろう?」

小川シユン(以下シユン)「ブレン、エリックの奴が好きなのは前からずつとジーナだけだつて。な?」

エリック上田(以下エリック)「確かに、タツミの言うのも最もなところもある。ヒバリ嬢はオペレーターとしての責務をしつかり果たしているし、いつも柔和な笑顔で僕たちを癒してくれる……。ミツシヨンから帰還した後、彼女の優しい笑顔で帰ってきたことを実感する奴は少なくないだろう。」

しかもヒバリ嬢の素晴らしいところはチャーミングなプリティフェイスだけじゃない。タツミのように鬱陶しいことこのうえないしつこい勧誘にも笑顔で丁寧に対応してくれるだけではなく、他の女性陣とも上手に付き合っている。見目麗しく、タツミの言うように魅力的なことは当然として、彼女はそこにいるだけで場の雰囲気や和やかになる。それゆえ僕たちは、ここに何としても帰つてこようと頑張れる訳だね」

シユン「お、おう……」

タツミ「なんだよエリック、分かってんじゃねえか!俺はお前のことを誤解してたぜ。ただの貧乳スキーマのむつつりじゃねえんだな!」

ブレン「:俺は、実はツバキさんのような女性がタイプなんだが……」

シユン「俺はやっぱリツカちゃんだなー。基本的に金以外のことはあんまりこだわらねえけどさ。リツカちゃんは可愛いって。なあ、エリック?」

エリック「そうだな。ブレンは真面目なところが強い。それゆえツバキ女史とは似た者同士で波長が合うのかもしれない。」

それはそうと、シユン。リツカちゃんに目をつけるとはなかなか良い目をしている。彼女は神機の整備が主な仕事だからなかなか話をする時間が取れないし、ほつぺたに油污れを付けているなど日常茶飯事だ。しかしそれは彼女がどれだけ真摯に神機に向き合っているかの証明でもある。彼女が日夜、僕たちの神機をメンテナンスしてくれ



ているおかげで僕たちは十全に戦える訳だね。

気さくに話しかけてくれるうえ、神機から僕たちの精神状態などにも気をかけてくれる。

そしてなんと言ってもあの唐竹を割ったようなさっぱりとした性格に助けられた人は多いはずだ。どれだけ大変な時でも、どれだけひどく悩んでいても、彼女は真剣に、真っ直ぐに聞いて応えてくれる。彼女は太陽のように眩しく笑顔が輝く女性さ。

さらにいうならあのツナギが最高に彼女の魅力を引き出している。彼女の素晴らしさをこれ以上ないほどに体现していると言つてもいいだろう」

シユン「お前……俺が言いたかったこと全部言ってくれやがって！ そうだよな！ リツカちゃん可愛いよな！」

ブレン「エリック、お前……。少し、変わったか？ 以前はジーナと仲良くなりたいたいとー」

タツミ「そういやそう言ってたな。エリック、実際ジーナのことはどう思ってたんだ？」

エリック「……ツフ。愚問だね。」

ジーナの素晴らしいところなんて挙げ始めたら切りがないが……。まずは見た目だ。

まず眼帯。普通の人があこの眼帯を見たらこう思うだろう。『うわっ、中二病……』と。だが、これに彼女が歴戦のスナイパーだという情報が付け加えられればどうか。

彼女の眼帯はファツシヨンというより、まさにスナイパーらしさを強調するアクセントとなる。

そしてあのぱつと見クールで無表情なところだ。しかし実際には、ジーナはかなり分かりやすい。嬉しければ顔が綻ぶし、恥ずかしければ僅かに赤面する。ジーナの恥ずかしがる表情はまさに至宝のものだが、君たちには見てほしくないな。僕はあの顔のジーナは独り占めしたいんだ。すまない。

あの慎ましやかな胸も最高だ。大きい胸を否定する気はさらさらがないが、僕は、ジーナはあのスラツとしたスレンダーなスタイルの良

さが好きなんだ。正直に言うなら、彼女の胸に顔を埋めて体温と柔らかさ、そして生きている証である、心臓の音を堪能したい……。ああ、想像したらもう堪らないっ……！

そしてあのしつとりと肌触りのよさそうなお腹だ。無駄の無い美しい肌。そこに控えめに主張する綺麗な縦のおへそ……。素晴らしい。許されるものならあのお腹を満足いくまで撫で回したい。

それだけではない！あの華奢な肩、そして腰、背中。女性らしさに溢れているが、生きるといふ躍動感に溢れたところなんて、もう筆舌に尽くし難い……。あれだけ細く、抱き締めたら折れてしまいそうにも関わらず、彼女の神機が火を吹けば、荒々しく蹂躪していたアラガミが倒れていくんだ。素晴らしいコントラストだよ……。

あの脚線美や優しさを内包する透き通った瞳なんかも素晴らしいのだが……。そろそろ内面の素晴らしさを語ろうと思う。

彼女はぱつと見無表情でそっけない印象を受ける。だが、実は彼女はかなり情に厚い。ミッションに同行するメンバーのことをいつも気にかけているし、スナイパーゆえの観察眼からかなり正確に心理状態を読み取ってサポートしてくれる。彼女のサポートの的確さを知ったらもう僕はカノンちゃんとは出撃出来なくなった……

タツミ・シユン「……(ウンウン)」

ブレン「……？」

エリック「そして何より敵との命のやり取りでは自分の命を勘定に出来ないくせに、メンバーの命は絶対に勘定に入れていることだ。誰かと共にいれば、必ずその誰かが無事生きて帰ってこられるように的確なサポートを、時には体を張ってしてくれる。僕がクアドリガの足元でくたばりそうになった時、彼女が必死に僕の元に来てリンクエイドしてくれた時にはもうすっかり惚れていた……。いや、それ以前から好きだった。ともかく、彼女が女神に見えたよ……。」

タツミ「……とりあえず、お前がジーナ大好きってことはわかった。

あー、ところでエリック……」

エリック「……？なんだい？」

タツミ「……すまん。後ろを後ろをしてみる」

エリック「…ジーナ。やあ、どうしたんだい？」

そう言っただけのもののように髪をかき揚げたエリックの声は、ちよつと震えていた。

「…いや、あんたがミッションに着いて来てほしいって言うから来たんだけど」

「何？もうそんな時間かい？…待たせてしまつてすまない」

そう言つてそそくさとカウンターに向かうエリックを尻目に、タツミとシユンはどこかへ退散していった。

そしてこの後、エリックとブレン、私の三人でミッションにゲートから出て行つた。

その時の、

「ジーナ。…どこから聞いてた？」

「全部」

「そうか。参つたな…」

そう言つて、顔を赤くしてはにかむ彼の顔が印象的だった。

## デート

「いやー、疲れた…」

「そうね」

やあ皆。皆大好きエリック上田だよ。くりいむは関係ないよ。どうでもいい？さいですか。しょんぼり。

さて、今回はハルオミ氏は出張、防衛班は外部居住区への出勤ということで、愛しのマイラブリーエンジェルジーナさんと二人きりで猫公ことヴァジュラ狩りに行ってきました。獣神雷毛の14個目まではテンポ良く出たんだけど、残りの2つがなかなか出なくてね…。

とは言え、全俺が大好きジーナさんと二人きりで、二人きりで！ヴァジュラ狩りとは言え、これはまさに戦場におけるデートと言っても過言ではないだろう。

そう、デート行ってる間に二人の間には愛が育まれ…たかどうかはわからないけど、少なくとも僕の気分が有頂天なことは間違いない。ジーナさん大好きです。でも最近自分が戦闘不能にならなくなってきた、ジーナさんとのふれあい（リンクエイド）が減ってきた。つらい。(・ω・)

荷電性のボルグから既に針は必要な数を集めてあるし、これで榊博士（別名胡散臭いペイラー博士）のお使いは終了のほうである。多分…追加で素材集めとか来ないよね？ね？

そんなことを考えながらゲートに帰ってくると、思わぬ先客が居た。ユウ君、コウタ君、サクヤさん、ソーマだ。第一部隊の面々である。ちなみにアリサちゃんが居ないのはまだこちらの支部に編入されてないから。…ところでリンドウさんはいずこ？

気になったのでソーマに聞いてみた。基本的に新人はリンドウさんが場慣れさせるはずだが…。

「やあソーマ。君たちも今帰投したところかい？」

「ところでリンドウの姿が見えないようだが…」

「ん…？」

ああ、エリックか」

「あーエリックさん！ジーナさんも！

聞いてくださいよ！リンドウさん、なんか自分はデートとか言って俺らだけ任務とか！

ずるいつすよね！」

そう言つて突然話に割り込んできたのはコウタ君だ。ソーマが不機嫌そうにしながらも何も言わないところを見ると、いつもこんな感じなんだろう。

しかしそうか。リンドウさん、もうデートか。

つてことは、多分これ帰つたらウロヴオロスの放送かな。もうそんな時期か…。

間に合つて良かった。

ソーマやサクヤさんの顔を見ると、なんとも言えない暗い雰囲気を漂わせている。まあそうだよなあ…。

「んー、そうか。リンドウはデートか…。

そう言えば、ソーマも」

「エリック、そのおしゃべりな口を今すぐ閉じろ…」

ソーマもデート行つてるよね、と言おうとしたら黙殺されました。やれやれだ。肩をこれ見よがしにすくめて話を切り上げる。

「まったく、ソーマもつれないなあ…。

まあ良いさ。とにかくそっちもお疲れ様」

ゲートからアナグラに出ると、すぐ手前のソファにリンドウさんがふんぞり返っていた。まったくもって偉そうである。実際偉いんだけどね。

リンドウさんは第一部隊の面々と僕達を見つけると、気軽に片手を挙げて声をかけてきた。

「おー、全員無事生きて帰ってきたみたいだな。

…エリックとジーナまで一緒とは思わなかったが」

「やありンドウ。さつきコウタ君から聞いたよ。

デートに行つてきたんだって？」

「ああ…。なかなか元気が良くてな。相手をするのが大変だった…」

「リンドウが大変となると、結構な暴れん坊かな。なんにせよ、念のため医務室へ行くことをおすすめするよ」

「あー、そう心配することはない。大丈夫だ。」

…ジーナも、エリックのお守りは大変だろ？」

「…別に」

ちらつとジーナの顔色を伺ってみたが、どう思っているのかは読み取れなかった。元から表情あんまり変えないしなあ…。

「リンドウ、そろそろ今回の任務の報告してもいい？」

サクヤさんがリンドウさんにそう声をかけた。ふむ、少し話しすぎたかな。

「リンドウを独占してすまなかった。それじゃ皆、僕達はこれで」

そう言っ僕とジーナは切り上げた。

リンドウさんは話がしやすいから、つつい長く話をしてしまうね。

「おう」

「…フン」

「お疲れ様っす！」

「お疲れ様」

上から順に、リンドウさん、ソーマ、コウタ君、サクヤさんだ。ユウ君は普段からあまり声を聞かない。ゲーム基準なら確かにまあこうなるよね。でもソーマは普通に話しかけられたりしてるらしいんだけどなあ…。

階段を下りるとちようど放送が始まった。

『第七部隊がウロヴオロスのコアの剥離に成功。技術班は直ちに〇〇会議室に集まって下さい』

繰り返します…』

「第七部隊、ね…」

ジーナさんがポツリと呟いた。

実際はリンドウさんが一人で倒したんだよね。これ。

「まあ、実際のところはリンドウだけど…って、どうしたんだい？そんな鳩が豆鉄砲食らったような顔して」

「…あんた、前はこういう時『第七部隊か…。ふん、だけど僕だって華麗にそれくらい倒してみせるさ！』とか言ってたじゃない」

俺がエリックになる前の話をされると困る。記憶にはあるんだけど、どこかこう、映画を見てるような感じで自分のことだと感じられないんだよね。しまったな。

「僕だって、多少は成長するのさ」

「ふうん…？」

そういうことにおこう。ジト目でこちらを胡乱げに見てくるが、ここはゴリ押す。下手な言い訳など無用…っ！

「ま、そういうことにしといてあげる」

そう言っつてジーナは追及をやめてくれた。助かった…。

博士の元へ行くと、コウタ君とユウ君のためのものだろう、アラガミ講座の準備をしていた。

博士、「材料持ってきたぜー。」

「おお！エリック君じゃないか！

そうか、もう集めてくれたんだね？」

うむ。

ランク3の20型ガット真で難易度6のヴァジユラ狩りしてきてやったぞ。死にまくったけど。褒めるがよい。

「ふうむ、そうすると、予定より早く取りかかることが出来るかもしれない。

そうだね、また明日ここに来られるかい？」

博士の研究室に？何故？

「君も知っての通り、先ほどウロヴオロスのコアが確保された。これを神機にするために今整備班の面々は集められている訳だけどーー」

博士はそこで言葉をきり、胡散臭い笑顔がこちらを見た。こっちは見んな。あと早く続きを言え。

「ーーそうすると、整備班。つまり、リツカ君の力を借りられなくなってしまうんだ」

でっ。

「つまりこういうことだよ。

私は手伝ってくれる人員が欲しい。しかし今、整備班は忙しい。

そこで君には、私の手伝いをしてもらいたいのだ」

…別にそれは構わないけども。

ただ、俺は神機に詳しくないぞ？何をすればいいんだ。

「何、別に手伝いと言っても既に理論は出来てるからねえ。私が手



伝ってほしいのは――」

「――人型のアラガミ。その捜索さ」

## メインヒロイン、登場!

アリサがアナグラにやってきた。

パッチリとした瞳。雪のように透き通った白い肌。負けん気の強い態度。

口から出る敬意の欠片もない言葉の数々。

平然と上から喋るロシアっ娘は、あつという間にアナグラの雰囲気  
を険悪にした。さすがやでえ…。

ただまあ、彼女が精神的に不安定でメンタルプログラムが組まれて  
いるらしいことがツバキ女史から僕やリンドウ、サクヤさんと言った  
面々には個別にこっそり教えてもらった。リンドウもサクヤさんか  
らも聞いたかどうかの確認されたけど、僕に教えたところでもないせ  
えっちゅうねん。20型ガット真やぞ。足手まといエ…。

要は気にかけてほしいということなんだろう。気の強いツバキ女  
史が珍しく心配そうにしてたし…。

まあそれはそれとして。

おくしゆり(坑アラガミ化薬)をペイラー榊博士が作っている間、僕  
は普段の任務をこなしつつ、人型のアラガミを搜索することになっ  
た。

あの後榊博士に真っ先に

「人型のアラガミなんてそこらにたくさんいるじゃないですか」  
と言ったら、

「本当かい!？」

なんて気色ばんで詰めよって来た。

そこらにたくさんいるじゃない。シユウが。

そう答えると、

「違うよ…。確かに人型だけでも…」

とか言ってがつくりしていた。

じゃあ神機兵かな(すつとぼけ)

…シオ？フェンリルの旗？なんのことやらさっぱりわかりませんね。

今のところ、ユウ君が成長してくれることとリンドウが生きている確率をあげる以上にストーリーに介入するつもりはない。無印やらバーストをやってきた身としては、下手な介入で原作から外れる方が不味いと思うの。主に終末捕食が。月があんななってしもたからね。仕方ないね。

つまり、さよなら幻想の平和。いらっしやい世紀末。

どうあがいても世紀末なあの感じの世界へようこそ。楽しくなってきましたねえ（ゲス顔）

さて、今日は（悪い）噂で持ちきりのアリサたんが、リンドウ&サクヤさんという超絶高生還率パーティーで出撃している。

うん、それはいいんだ。それは。

けどだね？だからと言って、残りの第一部隊に僕を突っ込むのはやめてください。僕はジーナさんとが良いんだい！そう思ってクソデカため息をついていると、神機を担いだフードマンなソーマが声をかけてくれた。

「なに今さら暗い顔してやがる」

そうは言うけどさあ…。

僕たちは今、贖罪の街の出撃前の高台にいる。

メンバーは僕ことエリック上田。

そしてコウタ君。元はツバキ女史の神機とか羨ましい。僕の20

型ガット真と交換しよう。

さらにユウ君。君、このあいだオウガテイルを狩る任務で出たヴァジユラを倒したんだってね。ヒバリちゃんが言ってたよ？交戦は避けて下さいって言ったはずなのに、気付いたら戦ってたって。そしてさらっと倒してたって。：彼女の負担は計り知れない。

ええい、極東の神機使いは化け物か！

ところでその新型神機いいね。僕のと換えない？

あとソーマ。このあいだ君リンドウに叱られてたね。

放っておくと自分から死に行くようなやつには何度だって言うぞ。絶対に死ぬな。って。

彼の友人としては、リンドウの提案に賛成である。君影の主人公やからね。

：ところで皆さん、お気づきいただけただろうか。

そう、このメンバーだと、リーダーは僕になるということ。

コウタ君（新人）、ユウ君（期待の新人）、ソーマ（死に急ぎ野郎）、上田（一応二年目）。

はい。出撃前にもツバキ女史とヒバリちゃんから言われました。今回のリーダーは自分だから頑張れと。気が乗らないけど、まあやりましょう。

「よしーじゃあまあ始めようか。

とりあえず、今回の第一目標の共有をしよう。

今回の第一目標は、『絶対死なないこと』。以上！」

「や、それでいいんすか」

コウタ君がツツコミをいれるも、正直これが真理だ。それでいいです。

三回死ねば（というか戦闘不能になれば）ミッションは失敗になる。でもね。無印のストーリー終了後のストーリー用のこう、光ってるミッションがあるじゃない。あれだと特にそうなんだけど、割りと普通に通に三回死ぬ。乱戦は特に。

マータとピターの組み合わせは凶悪でしたね…。ええ。

だが、自分一人でもなんとか生きてさえいれば、まだ可能性はある。他をリンクエイドしまくる機構となるのだ。それで乗り切ることが出来る時もある。死なないのが一番です。

「コウタ君。今は倒せなくても、生きてさえいれば倒せる日が（いつか）来る（かもしれない）。だから、それでいいんだよ」

「そういうもんっすかねー」

「ソーマ、ユウ君。いいね？」

「…（コクリ）」

「…チツ」

若干不安なメンバーもいるけど、今回の相手はノーマルグボロ、かつ危険度2のミッシヨン。

油断と慢心をしなければ、五分から十分で無事に倒せるはず。

さあ、僕たちの戦いはこれからだ！

僕は颯爽と神機を持って、高台から飛び降りた。

## サツバツめいたアトモスファイア

アリサがアナグラにやってきてしばらく。

アナグラ内の雰囲気の険悪さにはますます拍車がかかってきている。癒しはリツカちゃんやオペレーターの子バリエ、あとは今日もふつくしい…ジーナさんくらいのものだ。あのサクヤさんすらも、形の整った眉を八の字にしていることが増えている。

ほら、あなたにも聞こえてきませんか。耳を澄ませば、今日も絶えない殺伐とした口喧嘩が…。

「…だから、きつきから何度も言ってるじゃないですか！アラガミが来ているなら、どんなことをしても早急に民間人を避難させることが優先でしょう！」

「だからって、神機使いが民間人を神機で脅すのはやり過ぎだろう！しかも、民間人がまだ避難しきってないのに勝手に戦い始めるしよ！」

「そう言う貴方達が民間人の避難に手間取っているからああしたんです。それを言うなら、貴方はあのと意味のないところでホールドトランプしかけてましたよね？どうしてあれを民間人の避難が終わってない時に使わなかったんですか？」

「そ、それは…。まだ、使う時じゃないと思っただよ！」

「話になりませんね…」

ああ…。またやってるよ…。

今日はアリサちゃんがヘルプで防衛班と一緒に出撃したらしいんだけど、シユンが良いように言われている。

アリサちゃんもともと口が過ぎるところがある。それゆえ、今彼女に普通に接しているのは第一部隊でもリンドウとユウ君くらいだ。

サクヤさんもアリサを諫めることが増えていて大変そうだし、コウタ君はさつそく面白くなさそうになっている。…まあ彼は榊博士のアラガミ講座で不真面目にもぐうすか寝ていたらしいし、今のアリサ

とは分かり合えないかもだね。

ソーマは相変わらず人を避けてるし。せいぜい僕やリンドウと一言二言話せばいい方だ。まあ、ソーマは不器用だからなあ…。まったく、本当に手のかかる友人だ。やれやれだ。…はっ。これが噂のやれやれ系主人公というやつか。エリナ、やったよ！ついにお兄ちゃんは主人公らしくなったよ！なお武器はクソザコナメクジ。つらたん。

アリサちゃんの言うことそのものはそう間違っていないたまけどね。言い方がまああれです。うん。キツツイ。

もう少し手心を加えてあげて…と言いたくなるような言い方をする。

謙虚な当たり方の方の出来るリンドウは凄いと思う。いやマジで。…しかし今、あたりにリンドウはいない…。

ふと、ヒバリちゃんと目が合った。

目と目が合う♪

…あ、あれを止めていいと？

周りの人達すら遠巻きに眺めているだけだというのに？

…君は僕に爆心地に行つて死ねと申すか。

よかろう。行つてみよう！

エリック、逝きまーす！

ますますヒートアップしているシユンとアリサちゃんの元につかつかと歩いていく。

見ると、シユンがアリサちゃんの胸ぐらを掴もうとしていた。待つんだシユン！それは事案だ！

アリサちゃんの貴重な下乳が丸見えになってしまう！

そう思つた瞬間、ガツとシユンの腕を掴んでいた。セーフ。間に合った。

シユンの手はアリサちゃんの胸元から5センチと離れていない。…犯罪臭がしますねえ…。

そんな馬鹿なことを考えている間に二人から睨まれていた。なん

でや、僕悪くないやろ。

とりあえず、シユンの方から宥めることにする。

「シユン、それ以上いけない」

「…うるせえ」

そう言つて顔を背けて腕を振り払われた。うーん、シユンは既に極東で5年くらいやってきてるくせして相変わらず協調性に難があるね。…まあいまだに上官からたびたび注意されてるしなあ。

なんにせよ、感情的になつていたのが少しは冷めたようだ。ふてくされながらも何も言わないのがその証拠である。シユンは拗ねると長引く上に変に拗らせるからね…。君はロン・ウィーズリーか。

「さて、アリサ君」

そう言つてアリサちゃんの方を向くも、いかにも私悪くないですという顔をしていた。うーんこの。

「なんですか？言つておきますけど、私何も間違つたこと言つてませんよ」

…ああ、こつちはもつと感情的になつてるね。これ、この場で何を言つても通じないやつだ。

うーん、こういう時は時間を置くのが一番良いんだよね。僕に飛び火しても嫌だし。よしそうしよう。单子葉。理科かな？

「…君が言ったことに何か言うつもりはない。ただ、もう少しだけ周りの様子に気を付けてはくれないか？」

「周り？………あ」

僕がそう言つと、周りからの視線に気付いたようだ。

うん、けっこうな人数が心配そうに、もしくは不機嫌そうにこちらを伺っている。

「別に出撃後にデブリーフィングをすることは構わないけど、二人共感情的になりすぎだ。

今日はもう休むなり、一度自室に戻つて落ち着いた方が良い。

…二人共、いいね」

「………分かりました」



「しょうがねえな……」

そう言いつつ、二人共お互いを見るとフン！とそっぽを向いて歩いていった。

つ、疲れた……。ジーナたん、僕の荒んだ心を癒してくれ……。

## 戦士達の小休止

やあ皆。僕は皆に愛されてやまない孤高のヒーロー(笑)、上田ことエリック。気軽に上田君と呼んでくれ。

もしくはジーナたんファンクラブ会長でも構わない。まあ、ジーナたんファンクラブは僕しかないんだけどね。人がころころ配置転換(という名の調整。バンバン人が死んでいくから仕方ない)させられるからね。なかなか固定の人のファンクラブというのは出来にくい環境なんだ。そういくと雨宮姉弟はファンクラブらしきものがあるらしいからね。凄いことさ。特にツバキ女史のファンクラブは凄い。

『罵つて下さい!』

とか

『ああつ、あのヒールに踏まれながら蔑んで!』

『もつと私を叱つて下さいお姉様!冷たく睨まれながら他の人の前でこつぴどく詰つて!お願いしますっ!』

とか。

これよりも凄い(放送禁止用語が出てくるやつ)人達すら居るという噂だ。: 凄いでしょ?ここ、人類の防衛線の最高峰なんだぜ:。いや、むしろ危険だから欲望に素直になるのか?:?まったく、もつと僕のように慎みを持ってほしいものだね。

さて、最近アナグラの雰囲気明るくなってきた。

タツミ(相変わらずのヒバリちゃんラブ勢)やブレン(実は若干天然だと分かった)がアリサちゃんの実力を認めるようになってきたこと。アリサちゃんの扱い方がだんだん分かってきたこと。

そして、神薙ユウ君がいろんな人との橋渡しになってきたからだろう。

最近のユウ君は相変わらず絶好調なようで、グボロにシユウにコンゴウ2の混戦を平然とやってのけ、コウタ君に精神的ダメージを負わせたり。

アリスちゃんやサクヤさん、コウタ君にソーマ、リンドウは言うに及ばず、タツミやブレン、ジーナさんにシユン、カノンちゃんにカレルにヒバリちゃんにリツカちゃんまで、分け隔てなく仲良くなっているようだ。

でもユウ君、僕と君だけでひたすらカウボーイに出撃は止めようか。あれ、オウガテイル倒すだけでしょ？なんで君は真っ先にヴァジユラの元に行くのかなあ？

そういうのは僕じゃなくて、アリスちゃんを連れて行ってやりなよ！もしくはソーマ！僕は君より弱いんだぞう！？

…とまあ、とりあえずユウ君のおかげでアナグラがだいぶ明るくなってきた。

ただ、僕は知っている。

この後、ダブルブッキングによってリンドウが生き埋めになり、マータの後にピターさんからの歓迎会が行われることを。

そしてなにげに、その時第一部隊は複数のマータに囲まれており、むしろリンドウよりも死にそうな環境に放り出されることを…！

ちなみに既にリンドウには榊博士作の抗アラガミ化薬を渡してある。お守り袋に入れて。

「ヤバくなったら開けるんだ」

と言つてあるし、まあ気休め程度ではあるけれど。

…だつてあんまり原作から解離すると、真面目に終末捕食で地球がヤバいかもしれないですしおすし。

ちよつとした生還率アツプくらいにしかな手を出せない、臆病な僕を許してくれ…。すまない、リンドウ…！

「…さつきから一人で何演劇やってるわけ」

訝るような目でジーナに見られた。死にたい。

リツカちゃん、エリックくんと

「ようサクヤ、ビールの配給券持ってないか？ビールと引き換えに、いい物みせてやるよ」

「いいもの、ねえ…。リンドウの言ういい物が、本当に私にとって良いものだったことなんてないじゃない」

「ま、そう言うなって…」

出撃ゲートから帰ってくるなり、リンドウとサクヤさんの夫婦漫才が耳に入るので聞き流す。…いや、この会話は確か…。

そうか。ヴァジュラの襲撃、リンドウの生き埋めが近いのか…。

そうすると、今度ソーマに会った時には、リンドウとアリサちゃんを二人きりにしないように伝えておこうか。

それと、ミツシヨン『蒼穹の月』に行く前に一声かけて貰おう。確かマータさんがひしめくという、けっこうヤバめな状態になったはずだ。

ゲームではリンドウ以外皆無事に戻ってきていたけど、この世界は既にゲームとは異なる。エリックが自分生きているからだ。つまり、必ず怪我なく戻ってこられる保証はない。

どこまで何ができるかわからないが、手は尽くすつもりだ。具体的には防衛班からなるべく人を引っ張ってきて、援護しながらの撤退。欲を言えば、全て掃討してリンドウに死なないよう伝えておきたい。出来る限り早く瓦礫をどかすことが出来れば、もしかしたらリンドウを救出できるかもしれないし。

とりあえずはヒバリ嬢の元へ。へーいタツミー！（ヒバリちゃんを）ナンパしてもいいけどサー、時間と場所をわきまえなヨー！つまり退け。

「ミツシヨン終了したよ」

「あ、エリックさん！お疲れさまです！

そういえば、リツカさんがエリックさんのことを呼んでいました

よ。今は、開発室にいると思います」

「ありがとう」

いつも通りの柔らかい笑顔で迎えてくれたヒバリちゃんにそう返し、エレベーターへ向かう。行き先はもちろん、開発室だ。

しかし、このタイピングでリツカちゃんから話か。なんの用だろう。

ゲームではあくまでも主人公視点で物語が進む。でも当然他の人達も何かしら動いている訳で…。

つまり何が言いたいのかと言うと、予想できないことがけっこうあるということだ。

この間も、突然リツカちゃんが部屋を訪ねてきたと思ったら、何か壊れたものがないか聞いてきたし…。暇潰しに他人のMDプレイヤーを直していくのはお年頃の女の子としてどうなんすか、リツカちゃん。

マフィンとかのお菓子作りをするカノンちゃんが普通に思えた瞬間だった。

開発室に着くと、ちょうど休憩中だったのか、背もたれのない長椅子に座ったまま足を投げ出すリツカちゃんがいた。リツカちゃんの手にある、あのけばけばしいピンク色の缶。…もしかして初恋ジュースだろうか。少し気になる。

「あ、エリック。待ってたよ」

「待たせてしまったか。すまない」

「あ、ううん。いいのいいの。私が急に呼んだ訳だし」

とりあえず、手近にあった丸椅子に座る。リツカとの距離は50cmと離れていないが、割とこの子とはこんな距離感で接している。近すぎず、遠すぎないこの距離感が好きだった。

「さて、今日は何の用だい？何か新しい武器の新型でも出来たか？」

そう。俺の知っている神機には、少なくともスピアとかサイズ(鎌)なんてのは無かった。ショット、ロング、バスター。盾ならバックラー、タワー、あと何か一個。銃はスナイパー、ブラスト、アサルト。

これが俺の知っている種類だ。

しかし、今既にスピアとかサイズ、あとショットガン？とかいう分類の武器の神機があるらしい。ちなみにだが、我が相棒の20型ガツトはなぜかブラスト／ショットガンとなっていた。ブラストだろ。少なくともショットガンとか俺は知らんぞ。

それはともかく  
閑話休題。

本日のお題は？

「あ、ううん。そうじゃなくて。

大まかにいって3つかな。」

一つ目は、エリックくつてば、ちゃんと爆発系のバレット使ってる？銃口付近から狙撃系のバレットの跡ばかりだから、結構整備が大変なんだけど」

ぷう、とほおを膨らませながらこちらを見てくる。うーん…。常に内臓破壊弾（狙撃系）とか脳天直撃弾（狙撃系）ばかりなのですが。ダメですか。そうですか。」

「…爆発系のバレットは、苦手なんだ」

「嘘ばかり。最近全然使ってないでしょ」

何故滅相もバレたレしません。

「もーっ。」

君の神機をいつも整備してるのは誰だと思ってるの？」

「それについては、いつも感謝している」

「それはまあ、前にも聞いたけどさ。…って、そうやってごまかすの禁止！」

「とりあえず、先に二つ目を教えてくれ。まだあるんだろう？」

「はあ…。しょうがないなあ。」

えっと、二つ目はね。最近神機にキズが少なくなってきたの。かすった程度のキズとか、使用跡とか、地面に擦れた跡くらい。

前はあるなにもガンガンキズついてたのにね。

…少しずつだけど、君も神機も成長してるんだね」

そういつて優しくこちらを見つめてくるその顔には、たしかな慈愛が見てとれた。…リツカちゃん、君そういうかわいところが卑怯だ

ぜ。思わず抱き締めたくなるだろ。ああ、俺が女の体であれば抱きついていたものを…。

そんな思いとは裏腹に、体が勝手に言葉を紡ぐ。…久しぶりにエリックが出てきてるな。

「ふふん、この僕を誰だと思ってるんだい？華麗なる極東の戦士、エリック・デアーフオーゲルヴァイデだよ！」

「あははっ、そうだったね。うん、君はそういうやつだった」

ファサツ、と髪をかき上げるマイボデイに対して、おかしそうに笑うリツカ。…こういった平和な時間が、永遠に続けばいいんだが。

まあ、そうはならないことを、この俺は知っている。だからこそ、こういった平穏を守るために、俺達はアラガミと戦うんだ。

リツカちゃんが落ち着いたところで、三つ目のことへ。

「三つ目はね。君の神機を調べて分かったことの報告かな？」

「ふむっ？」

なんだ？

「んつとね。エリックは、『オラクルリザーブ』って知ってる？」

「知らない」

「うん、それじゃあ説明するね。」

オラクルリザーブっていうのは、ブラスト型神機を使える人なら基本的に誰でも使える機能なんだ。

これは、今のオラクルを一時的に神機に溜めることが出来るの。そうすると、オラクルが大量に必要なバレットを撃てたり、オラクルが足りなくなってもリザーブした分から撃てたりするんだよ」

「なにっ！」

え、なにそれめっちゃいいじゃん。

…って、それたしかゴツドイーター2で出てきたやつじゃない？つまりメテオ。

ごめんリツカ。知ってたわ。

…嘘をついた訳ではないのです。間違えてしまっただけなのです…。

「それで、そのオラクルリザーブがどうかしたのかい？」



「…これは私が調べた限り、なんだけど。エリックの神機は、このオラクルリザーブの機能が使えないみたいなの」

「…あ、そう」

残念。メテオは撃てなくなりまして…。ま、そもそもそんなの無くてもこれまで平気だったし、正直無いなら無いで別にいいかな。

どうせメテオの中身覚えてないし。

「まだ原因は分かってないから、はつきりとしたことは言えないけど…。もしかしたらこの先、ずっと使えないかもしれない…」

そう言うリツカの様子はしょんぼりしている。まあ、この子にとって、神機の機能を十全に発揮できるようにすることが自分の使命みたいなものだからな。別に自分は気にしていないんだけど、リツカは気にしてしまっただろう。

「まあ、そう悲観することはない。また何かの拍子で使えるようになるかもしれない…。」

だから、そこまで気にするな。かわいい顔が台無しだ」

…後半はエリックが喋ったんだが。エリックって、結構こういうキザなことをたまに言うよな。顔が整ってるから嫌味にならんし。…ツハ！これは俺が軟派なことを言いまくっても問題ないフラグ!?

いや、俺はジーナたん一筋。浮気はすまい。…正直リツカちゃんはかわいいですが。

「…ん、ありがとう」

少しは落ち着いただろうか。

さて、こちらとしてもリツカに聞いておきたいことがある。ちょうどいい機会だし、聞いてみようか。

「ところでリツカ。

強化パーツ、ってあるだろうか？」

「え？あ、うん」

「オラクル自動回復量を増やすような強化パーツを作れないだろうか？」

そう聞くと、少し考えこむような仕草のあと、顔を上げる。座っている膝に肘をつけ、こちらへ手を向けながらこう言った。

「うーん…。ほとんど効果がなくていいなら、極僅かだけど、気休めくらいでいいなら作れると思う」

なに、マジか。

「頼む」

「え、ホントに？全然効果がないか、あつてもほとんど気休めだよ？」  
「構わない」

目をぱちくりさせているけど、オラクルの回復手段の確保は最優先事項なんだ。捕食によるバースト化ができないからプレーナの体力回復も意味ないし。や、全くない訳じゃないけども。

とりあえず、何でもいからオラクルポイントの回復は必須なんだよ。自動回復だけでは全然足りませぬ。

「ん、分かった。じゃあ、何か報酬を用意してよね」  
「つつしし、といたずらっぽく笑うリツカ。

報酬ね…。

「タオルとか」

「前にエリツクからもう貰ったじゃん。まだ残ってるよ」

なんておかしそうに笑うリツカ。うむむ、それは俺だけじゃないんだ。確かに記憶にはある。あるけど、エリツクの記憶だからどこか他人事なんだよなあ…。

しまったぜ。

「じゃあチョコレート、とか」

確かエリツクはけっこうなボンボンだったはず。その伝手でいけるだろ。

そう言うと、リツカは目を輝かせた。

「本当!? オツケー、交渉成立だね」

「ただし、期待する程の量はないし、いつ手に入るかもわからないぞ」  
期待しないで待て。

待て、しかして希望せよ。的な。

「いいよ。それじゃあ、次エリツクが来る時までに必要な素材をまとめておくね」

「よろしく頼むよ」

見るからに上機嫌になったリツカを残し、開発室を後にする。  
…よろずやさんに行つて、お金を増やしておくか。

## 野郎オブクラツシャー!

ミッションからアナグラに帰ってくると、アナグラの中がお通夜状態になっていた。ど、どうということだつてばよ。

出撃ゲートからロビーに入ると、カノンちゃんとゲンさんがソファアに座っていた。

「あ…：ジーナさん。それに、エリックさん…：」

悲しい表情で顔をあげたカノンちゃんがこちらに気付いた。…もしかして、リンドウか。

「ただいま、カノン。…：何があったか、教えてもらえるかしら」

「ジーナさん…：。リンドウさんが…：っ!」

ジーナがカノンちゃんに話を聞きに向かったが、カノンちゃんはこらえきれなくなったのか、ジーナの胸に抱きついて泣き出してしまった。やれやれ。…：はっ。これがやれやれ系主人公…：!?

なんて冗談はさておき。

あたりを見回すと、相変わらずフードを被ったソーマが腕を組んで立っていた。ソーマに聞くとしよう。

「やあソーマ」

「あ…?」

…：なんだ、てめえか。何の用だ」

睨まれてしまった。ひえっ。ソーマさんマジこええっす。思わず三下みたいになってしもた。

「何の用もなにも…：。一体、何があつたんだい、これは」  
知ってるけど。

一応今回の出来事のあらましを聞いた。

「…：リンドウの奴が自分を置いて帰投しろ、だとよ。そう言った本人は生き埋めになったまま帰ってこず、だ。

あのバカ、自分の言ったことすら守れねえのか…：クソ」

「…：リンドウの姿がないのはそういう理由か。死んだ、って訳ではないんだね?」

「俺たちが戻る前まではな」

「…そうか。ありがとう」

そう言つて、ジーナさんと共にヒバリちゃんにミッション達成の報告をしにソーマに背を向けた時、後ろから声をかけられた。

「…テメエは、死ぬんじゃないぞ」

心なしか、いつもより覇気のない弱々しい声。しかし。

「ふっ。愚問だね。この僕を誰だと思っっているんだい？」

そう、この僕は自意識過剰で自信家なエリック上田。エリック・デアーフオーゲルヴァイデだ！

ヒバリちゃんの元へ向かう途中でジーナさんと合流。ジーナもカノンちゃんから聞いた話は僕と大差なかった。むしろ、当事者の一人であるソーマから聞いた分だけ僕の方が詳しく知っていた部分もあった。

「…あのリンドウさんが、ね」

「ああ。僕たちも他人事じゃない。

…とはいえ、あのリンドウがそう簡単にくたばるとは思えない。あいつが帰ってくるまで、いつも通りのことをするだけさ」

「…ええ、そうね」

ジーナとはそこで別れ、カウンターの近くにいたリツカに声をかける。彼女もまた、暗い顔をしていた。

「あ、エリック…。おかえり…」

「リンドウの話は聞いた。まだ帰ってきてないんだって？」

「うん…。一応、捜索隊も出るらしいんだけど…」

リツカはそこで一度口ごもった。何やら言いにくいことのような。

「…捜索隊は、あくまでも『神機の回収』を主な任務にしているみたいなんだ。だから…」

そう言つて、リツカは悲しげに俯いた。

…そうだ、だんだんと思ひ出してきた。

これはたしか支部長が企んだリンドウ暗殺計画であり、支部長としてはリンドウが生きていられると困るわけだ。そしてその手段はアリスちゃんに刷り込みを行うことであり、実行犯はオオグルマ。

…なんだかだんだん腹が立ってきたぞ？

オオグルマのやつ、絶対アリサちゃんにいかかわしいことしてるだろ。エロ同人みたいに。エロ同人みたいに！

そうと決まれば早速調査だ。

しばらくアリサちゃんは面会謝絶のはず。そうすると、オオグルマもそちらにかかりきりになるから…。

しばらくオオグルマの生活リズムを監視、そしてなんらかの手段でオオグルマの部屋に侵入。

怪しい証拠を見つけ出し、ツバキ女史にこっそり報告してやる。

ただ、支部長にバレるとまずい。彼が今回の黒幕である以上、ツバキ女史には知らせてもいいが支部長には言わないように口止めしておく必要がある、か…。

そんなわけで、ここから何日かオオグルマを尾行する。

尾行1日目。

彼の部屋は、サカキ博士の部屋の一つ下の階のようだ。

サカキ博士に人型アラガミの搜索を…。と言われたが、リンドウが帰ってこなくなつてすぐに言ってくるとかあんたは鬼か。

…いや、博士は博士なりになんとかしようとしているのか？

まあいい。

とりあえず、病室には午後1時〜午後4時までいるようだ。そのあと一時間は別の部屋に資料を持って移動。だいたい午後6時くらいには一度病室に戻る。そしてその後しばらくしたら自室に戻った。

尾行2日目。

午前中は支部長と話をして、その後自室に籠る。そして午後1時からはまだ病室に…。という流れのようだ。

一つ分かったこととしては、彼は資料を自室にある程度持つて帰る。

：今は面会謝絶ゆえに病室に入ることが出来ないとはいえ、病室は基本的にいつでも解放されている。そのことから考えると、恐らく重要な書類はオオグルマの自室にあるはずだ。そうすると、彼の部屋に侵入する必要があるようだ。

尾行3日目。

今日は午後1時にオオグルマが病室に入ったことを確認した後、オオグルマの部屋に向かった。

オオグルマの部屋のある階には、オオグルマの部屋以外には物置部屋がある程度だった。：人目につかないのは好都合だが、オオグルマが戻ってくる時に鉢合わせしないようにする必要がありそうだ。

オオグルマの部屋はカードキーで開くタイプの扉だった。：オオグルマのカードキーを奪う、か？

いや、自室から出る時にも周囲を警戒しているオオグルマのことだ。カードキーは、肌身離さず持ち歩いているだろう。

：たしかこの扉はオートロックタイプ。中に入りさえすればどうとでもなるんだが：。

部屋に戻った。ベッドにダイブしながら考える。

中に入りさえすれば、証拠をカメラに撮って部屋を出れば問題ない。エレベーターに乗りさえできれば勝利だ。

問題は、いかにしてオオグルマの部屋に入るか、だが：。

オオグルマは部屋を出て、一度辺りを見回してからエレベーターに向かう。その階にはオオグルマの部屋と物置しかないから少しシニールだが、侵入を目論むこちらからすると少々厄介だ。

しかし、周りが物置であれば周囲の警戒もおざなりなはず：。明日、少し早めに物置に入り、鍵穴からオオグルマが出てくるところを見てみよう。

尾行4日目。

そろそろ仕事しろとツバキ女史から呼び出しを食らった。呼び出しの時刻は午後1時。

しかしオオグルマが出てくるのを見てから向かうことになるので、ツバキ女史には悪いが遅れることにしよう。

すまない、本当にすまない。

物置に無事侵入し、こっそりとオオグルマの様子を伺う。

：やはり、オオグルマ自身、あまり周囲を警戒する意味を感じていないのだろう。軽くキョロキョロと見回したらすぐさまさつさとエレベーターに向かって歩きだした。オオグルマがエレベーターに向かってから、スライド式のドアが締めきるまでにわずかに時間があ

る。  
：天井に張り付いて、さつと入ればいける、か？

ゴムを靴の底に張り付けて、天井に細工をする必要はありそうだが  
…。

なににせよ、急いでツバキ女史の元へ向かうことにしよう。

尾行5日目。

と言っても今日はもはや尾行はしていない。昨日さんざんツバキ女史に絞られ、今日は朝から出撃しているからだ。ジーナにすら心配をかける始末であつたらしく、出撃前に

『…大丈夫？』

と聞かれてしまった。あやや、反省。

しかし天井に張り付くとかどうしろと…。

ミッションから帰投して気付いた。アラガミ糸だ。

アラガミ糸は強靱で、かつしなやかな性質をもつ。これを使って天井と壁の間に斜めに張れば、そこを足場にできそうだ。

天井側の糸を切り、壁にくっついた糸を引っ張れば、証拠の回収も簡単。

よし。あとは午後6時過ぎに、仕込みをしておくことにしよう。

侵入当日。

ドーモ皆さん。ニンジャ、エリックです。



アイサツは実際大事。古事記にもそう書いてある。  
現在は午後0時56分。もうすぐオオグルマが…。

来ました！プシュー、という音と共に、眼下にはオオグルマの黄色い頭の布が見えます。いつも通りキョロキョロしてすぐさまエレベーターの方向へ！

さあ！

グラサンニンジヤ、エリック上田のエントリーだ！

オタツシヤジュウテン！スライディングウウウ！

背後で扉が締まる。オオグルマに気づかれた気配はない。オオグルマ…。ハイクを詠め。

なんてアホなことを考えながら部屋を見渡す。

スチールの教師用のような机の上に、書類が煩雑に散らばっている。それ以外にはいくつもの白衣のかかった衣料用のラック。室内物干し的な。

あとは大きめのベッドと冷蔵庫。…いざという時、隠れるならベッドの下か？エロ本とかないよな。…ないよな？

なかった。よし。

さて、机の引き出しの一つには鍵穴が。…どう考えても、これ、くせえな。とりあえず上下にがちゃがちゃ揺する。だいたいこれでいけるはず…。

よし。開いた。

…中には数枚の書類。

リンドウの顔の写真がいくつかと、英文のレポート。

他にはプリティヴィ・マータの写真と英文のレポート、ディアウス・ピターの写真と英文のレポート。

…リンドウの写真のある書類には日付が載っている。その隣に、意味の分からないアルファベット。

○月x日、TL。

○月y日、TL。

○月z日、TL。

…

△月β日、T L。

△月γ日、T D。

∴。最後の日付は6日前。リンドウが未帰還となった日付と一致する。

決定的とはいえないが、明らかにおかしい書類だ。とりあえず全て写真に撮っておく。

他にもめぼしいものがないか探してみたが、机の上の書類は純粹にアリサの経過観察の記録ばかりだった。

ロシア時代の記録もあつたことから、引き継がれた書類も含まれているのだろう。

∴ちよつと気になる。

しかし時刻を見ると既に午後5時を回っていた。急ぎ部屋をでる。天井を見てもアラガミ糸はない。∴完璧だ。

このままツバキ女史にオオグルマのことを警告しておきたいところだが、今日はやめておこう。

自室のターミナルに今回の写真を保存し、データにロックをかけておきたい。

伝えるとすれば、明日か。

エリックがオオグルマの部屋に侵入した翌日。

『やめて……私のことなんてほうっておいて!』

『救護班！クッションを！』

『ああ……ゴメンナサイ……！』

ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
イ……！』

『パパ……ママ……！』

私……。違う、違うの……。私のせいじゃない……。』

『薬がきれるとこれほどか……。』

アリサ、私だ。わかるか』

『やめて……。もういや……。私に関わらないで……。』

先日、大森タツミ、ブレンダン・バーデル、台場カノンが私の元へ  
リンドウの捜索隊に同行させてほしいと直訴してきた。

正規の部隊が既に出ている以上、神機使いの同行は認められない。  
だから、すげなく却下した。

……本当は。リンドウの捜索に同行したい。いや、別に捜索隊が無く  
てもいい。ただ、バカな弟を探しに出たかった。

しかし、今の自分は既に神機使いでもなければ、正規の捜索部隊で  
もない。

「リンドウ……！」

あの時は辛くて、悔しくて、悲しくて。思わず壁に手を打ち付けて  
しまったけれど。

返ってきたのは手のひらの痛みと、変わらぬ胸の苦しみだけだっ  
た。

「リンドウ……」

エレベーターの中で、アリサのことを話したことがつい先日のはず  
なのに。まるで、遠い日の出来事のように。

返事が返ってくることはないと分かっているのに、つい口から弟の名が出てしまうのは。

きつと、私が弱いからなのだろうー。

「ツバキ女史」

エレベーターの前の休憩所でソファに力なく座っていた私に、頭上から声がした。

こんな呼び方をするのはアナグラの中でも一人だけだ。

エリック。エリック・デアⅡフォーゲルヴァイデ。

トイレをよく詰まらせ、清掃員の皆さんの話題になる男。リンドウが戻らなくなつてからはめつきり出撃が減った神機使い。

：リンドウが戻らなくなつてから、他の神機使いたちは出撃を増やしている者が多いなか、こいつはあるうことか全くと言ってもいい程出撃しなくなった。何を考えているのか…。

なんにせよ、しっかりとした姿で応対しなければ。私は背筋を伸ばして相對した。

「何か用か、不良少年」

そう私が言うと、彼はぼつが悪そうに頭をかいた。：普段の態度からは考えられない対応だ。珍しい。

「出撃しなかったことは申し訳ない。ただ、一つだけツバキ女史の耳に入れておきたいことがあります」

そう言って、彼はこちらを見た。

：真摯な目。

「…言ってみろ」

そう言うと、彼は困つたような顔をした。

「出来れば、場所を変えたいのですが」

「…何故だ？」

人には聞かれたくない類いの話だろうか。

私は少し警戒した。リンドウが戻らなくなつてからというもの、こやつの行動には不可解な点が多い。捜索隊や、支部長についてもそうだが…。

何やら、キナ臭いものを感じる。  
ややあつて、彼は口を開いた。

「…リンドウのことに関わる話だからです」

結局、セキュリティのことを鑑みて私の部屋で話をすることにした。リンドウ以外の男を自分の部屋に入れるのは、実はこれが初めてだ。

「それで？…わざわざ私にリンドウの話を振ったんだ。重要なことなんだろうな」

これで重要なことでなければ、貴様には防衛ミッションを一ヶ月連続でやらせてやる。

そう思いながら睨み付けると、彼は真剣な目でこちらを見つめていた。

「…重要な、話です。」

ツバキ女史。まず、これは既に確認された『事実』であるということとを、理解してください。

…アリサのメンタルカウンセラー、オオグルマは、リンドウの未帰還となるアリサの行動に、何らかの形で関わっている疑いがあります」

「何…？」

オオグルマ先生が？

いや、だがオオグルマ先生はリンドウが戻ってこなかったことにたいそう驚いていた。そして私を氣遣ってくれもした。

…馬鹿な話だ。

「…それで？それが事実であるという証拠はあるんだろうな」

「ええ。とは言っても、持ち歩く訳にもいきません。僕の部屋のターミナルに、データとして残してあります」

…ふん。どうだか。

正直、今のエリックの言動は不可解だ。

それを私に言っただけ。支部長もリンドウの捜索隊の手配がやけに迅速だった。何か知っていることは間違いない。そして、それを隠している。

実はエリックが裏で支部長と繋がっていて、オオグルマ先生が用済みになったからこのようなことを私に言ってきたのではないか？そんな考えが頭をよぎる。

「…それが事実であったとして、だ。

お前は、私に何をさせたい？」

正直に言うとは思っていない。だが、目の前のこの男は嘘を言っていないことは確かだ。

信じるつもりはさらさらないが、目的を探ることは有効だろう。

「…別にツバキ女史が僕を信じなくても構いません。ただ、神薙ユウくんを信じて下さい」

…なんだ、そんなことか。

「貴様に言われなくとも、彼のことは信じている」

貴様と違っただけか？

「話はそれだけか？」

「…ええ。それと、もう一つ。

とてもじゃないが、今の貴女はあまりに苦しそうに見える。僕が言えた義理じゃないが、リンドウを信じて今は休むんだ」

…出撃しなくなった貴様が言えた義理ではないな。

「では、失礼します」

そう言っただけ、私の部屋を去るその姿は、憎らしいほど颯爽とし

たものだった。

まず服を脱ぎます

「エリック。喜べ、本日の貴様の出撃任務は全て中止となった」  
「え？」

ツバキ女史に呼び出された第一声がこれである。き、今日はジーナ  
たんとの巡回任務という名のデートだったのに…。なっ、何をする  
だあーっ！

「返事はい、だ」  
「アツハイ」

「…まあいい。さて、支部長からのお達しでな。貴様をしばらく観察  
することになった。

では、まずは貴様の部屋に向かうぞ」

そう言つてツバキ女史はさっさと歩きだしてしまった。

え、僕まだ理解が追いついていないんですけど。

とりあえず、ツバキ女史が僕の匂いにまみれた部屋で、僕のかぐわ  
しきかほりに包まれてくれることは理解した。やったねたえちゃん  
！

…冗談です、冗談ですからそんなに睨まないで下さいツバキさん。  
その目は人を殺せる目です。

真の英雄は眼で殺す…！ランチャーでござったか。

さて、僕の部屋についての訳だが…。あの、そんなにじろじろみられ  
るとちよつと恥ずかしいんですが。

「意外だな。しっかり片付いているじゃないか」

「ええ、まあ。

小さい頃から父に散々整頓や調度品について、薰陶を受けてきまし  
たので」

「…そうか」

ツバキさんはそう言つて、ベッドに腰掛けた。

…地味に今気付いたんだが、これって美人な上司と個室に二人きり  
では…？いや、僕にはジーナたんという心に決めた女性がかががが。



「…さて、ここならもういいだろう。」

以前、貴様が言ったものを見せて貰おうか」

以前僕が言ったもの？はて。

「…さては、とぼける気か？貴様が証拠はここにあると言ったはずだと私は記憶しているがな」

「…ああ、そのことですか」

別に、ツバキ女史にあの書類の写真を見せることに否はない。ただ…。

「…お見せしますが、条件があります。」

これを守って貰えないのであれば、お見せすることは出来ません」僕がそう言うと、ツバキ女史は軽く肩をすくめて涼やかに笑った。

「ふっ、別に構わんさ…。」

…まさか、私の身体を好きにさせろ、などではなからう？」

そう言っていたはずらっぽく笑うツバキ女史だが、こっちはそんなことに構う余裕はなかった。

…そうか、そんな手があったのか！

思わず、ポン！と手を打った。ツバキ女史が絶対零度の眼差しでこちらを睨んでくる。や、やりません…。

「…たしかにその提案は非常に魅力的なツバキ女史ですから、ぐつとくるものではありませんが…。」

しかし、なめてもらっては困る！僕はこれでも紳士の中の紳士と言われた男！

決してジーナ以外の女性に振り向くなど！」

「…」

ツバキ女史が、蔑んだ眼でこちらを見ている。

フヒヒ、サーセン。

「はあ…。さっさとその条件とやらを言え。」

ただし！さっきのような条件であれば…」

「あれば？」

「貴様がこの世に生まれてきたことを後悔させてやる」

「未来永劫誓ってしません」

「よろしい」

完全に力関係が決定した瞬間である。

え？だいぶ前から決まっていたらどうって？それは言わない約束でしょ。バイキンマンがキレイキレイで手を洗ったら死ぬはずだよね、っていうのと同じくらいタバコってやつなのです。

さて、だいぶん脱線してしまったが。ここからはちよつと真面目な話。

「…条件というのは、オオグルマと支部長に言わないこと。それと、悟られないことです」

「…今まで通りに接しろ、ということか」

「理解が早くて助かります」

そう言うのと、ツバキ女史は白くてすらつときれいな手を形の整ったあごに添えた。…考える仕草まで様になるとは。美人は絵になるね。目の保養なりい…。

「…ふむ。まあいいだろう」

「…では、しばらくお待ち下さい。」

ロツクを解除しますから…っと。

はい、ではこちらへどうぞ」

そう言つて、僕は操作していたターミナルの手すり部分に横から肘をつく。

ツバキ女史がターミナルに向かって立つその隣から画面を見ると、ヴァジュラ、プリティヴィ・マータ、ディアウス・ピターと続く。

そして最後のページには――

「…リン、ドウ…」

ぼろり、と。ついこぼれてしまったように発されたその言葉に気付くこともなく、ツバキ女史はターミナルの画面を、いや。画面の向こうのリンドウの顔をじつと見ていた。

ぼろり、と。今にもこぼれてしまいそうなツバキ女史の豊満なバストをガン見する僕に気付くこともなく、ツバキ女史はターミナルの画

面に沿えていた手を離して僕の顔が軋むように痛い痛い痛いっ！

「…貴様は本当に節操がないな」

そんな暴力的なまでにふつくしい大きなモノを、胸元を大胆かつセクシーに見せる貴女に言われたくはないです…ガクッ。

その後五分くらいで目を覚ました僕は、ツバキ女史に話した。

リンドウが支部長のことを探っていたであろうこと。

支部長はリンドウをなんとか事故死に見せるように、危険なミッションに単独出撃させていたらしいこと。

それでもしぶとく生き延びるリンドウが、なにやら支部長の企みの一端を知ってしまったようであること。

アリサのトラウマであるヴァジュラ種の写真と共に、リンドウの写真を使って何らかの暗示や刷り込みをしたのではないかと推察していること。

実は博士にアラガミ化を抑える薬を作ってもらったこと。

リンドウにその薬を渡してあること。

きつとリンドウは生きているということ。

などなど…。

しばらくじつと聞いていたツバキ女史が、ため息をつきながらベッドに背中から倒れこんだ。

「…実はな。」

先日、リンドウ及びその神機の搜索が打ち切られることが、正式に決定した…」

「もう、ですか」

明らかに早い。

普通、少なくとも神機が回収されるまでは搜索が続く。神機はアラガミに対抗出来る、現状唯一の武器だからだ。

どれだけ人が死のうとも、神機だけは血眼になってこれまで搜索されるが多かったのもそのためだ。

…支部長の本気度合いがうかがえる。リンドウが消息不明になつてから、派手に動きすぎたか。それとも早すぎたか。

「もう、だ。」

…正直な。私は、貴様が支部長と繋がっているのではないかと思つていた。貴様が何かを隠していることは分かっていたしな」

「…何のことですか?」

「ふつ…。とぼけなくてもいい。貴様は嘘がつけないからな…。」

貴様の話では、リンドウに渡した薬は一錠で一ヶ月。九錠だから九ヶ月もつということだったが…。

実際、アラガミ化は進行するほど加速する。

…本当は、そこまで持たないと分かっているのだろう」

…この人は、本当に。

一番つらいのは自分だろうに、なぜそんなに優しい顔で笑えるんだ  
…!

「…なに、心配するな。」

さつきも言っただろう。貴様は嘘がつけんな。

…そんな貴様がリンドウは生きていと言うんだ。なら、私の弟は  
きつと生きている。…少なくとも、私はそう信じるさ」

「…そうですか」

「ああ。」

…さて、では今回の話はこれで終わりだ。支部長には、私から適当に話しておく。

…それにしても、良かったのか?」

「何がです」

「先ほどのデータだ。」

私にロック解除のパスワードを教えてください…」

ああ。そういえば、さっきの話の途中で僕の腕輪とパスワードでロックしたデータが見れることと、パスワードについて話したっけか。

とはいえ。

「ええ。そもそも、今回の件も支部長に目を付けられるつもりはありませんでした。」

もし、僕に何かあったときは…頼みます」

そう、まさか今回の件で支部長に目を付けられるとは思っていませんでした。

リンドウも、サクヤさんにビールの確保を頼んでいたし、僕も保険をかけておくべきだろう。

ソーマのように特務に従事させられるかもしれないし、リンドウのようにこっそり後ろから刺すようなことをされる可能性もある。

ただひとつ、確かなことは…。

僕は、童貞のまま死ぬ気はないということだ。

見てろよ支部長。あつと言わせてやるからな！

## 愛妹見舞

「…よし。戦王油ゲット。こんで確か全部」

「ん」

やあみんな。

今日もいつも通り、僕の大好きなジーナと一緒に、元気に素材集めさ。

今回は前にリツカに言っていた、オラクル自動回復量→極小の強化パーツの素材のひとつ、戦王油を集めてました。

リツカちゃんも博士に負けず劣らず、なかなか鬼畜な素材の収集をお願いしてきた。

混沌砲3、伝導体2、そして戦王油1である。これにプラスして10000fc(フェンリルクレジット)まで要求されました。ひええ。

まあ、そのついでで戦王鎧とかは集まったけどね。

でもなあ…。今の20型ガット真を28型ガットに進化させるには、戦王鎧じゃなくて戦王大鎧が必要なんですよね…。やれやれ、いつになったらRANK4に出来るのやら。

「…エリック、機嫌いいわね」

「そうかな？」

そんなに分かりやすかったらどうか。

たしかに僕は最近機嫌がいい。というのも、支部長じきじきにお休みをくれるらしいからだ。

思い返すのは五日前のこと。

ツバキ女史に突撃！男子部屋！された後、しばらくしてから支部長に呼び出された。

すわ特務か、暗殺か！と身構えていたが、支部長から伝えられたのは驚愕の有給休暇である。

『これから三日間、君には有給休暇を与えよう。たまには家族と会って、英気を養いたまえ』

ぽかんとしたね。

や、だつて支部長に絶対何か感付かれたと思つてましたし。そしてそのタイミングでの呼び出し。何かあると思わない方がおかしい。

そして警戒しながらも妹のエリナに会いに、叔母のライカさん（ライカさんさんじゅうろくさい）の元へ。

ライカさんはいろいろあつて極東にたどり着き、今はエリナと何人かのメイドさんと共に第一居住区に邸宅を構えている。フエンリル本部の居住区にある実家ほどではないが、ライカさんの家もまずまずの大きさのおうちである。

エリナと最後に会つたのはエリック、上田ア！の直前で、エリナとは新しい洋服を買つてあげる約束をしていた。

とは言つても、それは俺が上田くんになる前の話なので、俺としては実感がなく正直なところ、再会するのはちよつと不安だったのだが。

そんな心配は杞憂に終わった。

何故ならエリナが

『お兄ちゃん！』

と叫びながら飛び込んできてぶつかる直前、突然エリックの身体が勝手に動き、エリナを愛しい妹ふわりと柔らかく抱きしめながら華麗にくるりと回転し、事なきを得たからだ。

お前それをオウガテイルの時にやれよ…。そしたら死ななかつただろうに…。

そう言いたくなるくらいにその動きはまさしく華麗であり、エリナ

を見ているともう愛しくてたまらないという感情が沸き上がってくるレベルである。お前、シスコンだったのか…。

いや、よく考えれば、そもそもエリックが極東にいるのは、数多くの反対を押し切って、妹のエリナが極東の叔母の元で療養するのに寂しくないように、という理由だった。だからこそリンドウも、へっぴこだった頃からエリックのことを認めてくれていたんだろう。

ちなみに叔母（36）は独身である。姉御肌なんだけど、なんと言うか、F G Oの女海賊の船長さんみたいな豪胆さがあるから…。

あと、メイドの咲夜さんがちよこちよこ姿が見えなくなっていた。なにやら外で戦闘のような金属音がしていたし…。最近治安が悪くなったんだろうか。なんて思いながら、久しぶりにゆつくりとした休日を過ごしたのだった。やれやれ、妹は最高だぜ！

私だ。ヨハネス・フォン・シツクザールだ。

裏でこそそと私のことを嗅ぎ回っていたリンドウを無事始末出来た。そう思った矢先の出来事だ。

『支部長。ここのところ、エリックさんが一切の出撃を行っていません。どうしますか？』

そう連絡してきたのはオペレーターの竹田ヒバリ。彼女は実にオペレーターとして有能だ。

しかし、今回の連絡内容は少々厄介なものだった。

エリック・デアIIフォーゲルヴァイデ。



フエンリル本部の膝元、フエンリル本部居住区の中でも有数の家、フォーゲルヴァイデ家の息子であり、療養中の妹のためにわざわざ極東へとやって来た変わり者。

来た当初は、この愚か者はわざわざ自らの死期を早めに来たのかと思つたものだが…。

さすがはフォーゲルヴァイデ家の血を引くものというべきか。二年経つ今でも前線で戦うゴツドイーターだ。

彼の立場上、危険性の高い特務に就かせるのは、フエンリル本部のフォーゲルヴァイデ家から不要な干渉を受ける可能性がある。いくら本部とロシア支部を傀儡としているとはいえ、不要な反乱の芽はない方が良い…。

それに、ペイラーから

『彼には私の手伝いをしてもらつていてねえ…。』

そのように、よろしく頼むよ…?』

と釘を刺されている。…彼本人に直接干渉するのは好ましくない、か。

だとすると、オオグルマのことを信頼しているらしい雨宮女史に探らせてみるか。

アリサに刷り込みを行っているオオグルマのことを信頼する程度だ。あまり期待は出来ないが…。

新型神機使いをあまり個人の戦力とするのもまずい。それゆえ、オオグルマがアリサに身体的接触をすることを禁じた。監視も付けている。

だが、オオグルマは彼女を好きにしようとする素振りが見られる。まったく、悩ましい限りだ…。

エリックの妹、エリナについては弱点足り得ないことは、既に証明されている。

エリナ自身にはなんら脅威はないが、その保護者。

ライカ・デアーフオーゲルヴァイデ。

彼女の持つ戦闘力が危険だ。

『破壊する』能力。彼女はこの能力に特に秀でており、フェンリル本部からはその危険性ゆえに封印指定されている。しかし遣わされた執行者達を全て薙ぎ倒し、現在は「障らぬ神に祟りなし」とばかりに放置されている。

特筆すべきはその恐ろしいまでの破壊能力であり、謎の力で監視が全身を複雑骨折させられていたり、棒切れでヴァジュラのようなオウガテイルを倒したという噂まである。

事実、どのようなまくらでも彼女が使えば斬れぬものない刃となり、徒手空拳では剣を使うよりも更に危険だという話すらある。

よろず屋とも親交があることから、おそらくこのアナグラ内の情報についてもある程度は把握していると見ておいた方が良いでしょう。

従えているメイドの一人は、姿が見えなくなつたと思つた時には監視が全て無力化されていたことも、危険性に拍車をかける。

「…何も問題はない」

そう呟くも、声の震えは誤魔化すことが出来なかつた。

いつそ休日を与えて、その間に強襲させてみる、か…。

## ロクデナシⅡ

「疲れた…」

アナグラ、出撃ゲート前のロビー。

そのソファーに仰向けになっている、上半身に刺青を入れ、真っ赤なツンツン髪にサングラスというド派手な格好な男がいた。俺です。上田です。

今回のミッションは久しぶりに地獄を見た。

今日、僕は思い出した。この世界は…無印なんだ…。

ふと、ほほをつんつんされていることに気が付いた。だいたいこういうことをしてくるのはリツカなんだが、はて。

そこにいたのは、僕が大好きなジーナさんその人であった。おお、今日もふつくしい…。クールビューティーである。そして絶壁。だがそれがいい！

「…大丈夫？」

いつも通りの平坦な声の裏に見え隠れする心配が、僕の疲れきった心を癒してくれる。ああ。心がびよんぴよんし…。いや、そういうのではないな。うん。

愛するジーナさんの顔をじっくり見ながら堪能しつつ、ゆつくりと上体を起こす。

「ああ、ありがとう。ただ、今回はあまりにも疲れてしまっただけ…。良ければ、話を聞いてくれないか」

「…そ。何にしても、もうロビーは消灯する時間よ。」

場所を移しましょう」

そう言っ、返事も待たずにさっさとエレベーターへ向かって背を向ける。ちよ、どこ行くし。

「それは構わないが…。どこへ行くんだい？」

そう問いかけると、ジーナは顔だけこちらに振り向いた。その透き通った瞳に人知れず鼓動が跳ねる。

「…私の部屋だけど、嫌だったかしら」

「めっそもぎいません」

むしろご褒美です。はい。

エレベーターを降りてジーナさんの部屋に向かう。

ジーナさんの後ろ姿はあまりに細くて、まるで抱き締めたら砕けてしまいそうな儂さを孕んでいた。

ああくそ、心臓がうるさい。エリックもジーナのことを意外と気にしてたのかもしれない。なんとなくそう思った。

部屋に入ると、ジーナはさっさと自分のベッドに腰掛けてしまった。

こちらも手頃な椅子に座り、ばれないように深呼吸してジーナの部屋の匂いを満喫する。ふはー……。いい匂いやあ……。そこ、変態チツクとか言わない。

「それで？何があつたわけ？」

そう聞いてくるジーナは、あごを両手で支えて、両肘を膝につけていた。うーん、あざとい。いや、ジーナが狙ってそういう姿勢を取ってるわけじゃないと思うけども。

「そうだね……。どこから話そうか……」

そう言つて、僕は今日の戦いを思い出していった。

そう、事の発端は第一部隊の人員が足りないことだった。

コウタ君曰く、

『ツバキさんは怒ってるし、こんな時にソーマはいないし、サクヤさん

は部屋から出てこないし、アリサは寝込んでるし…』

ということ、急遽僕とカノンちゃんがヘルプに呼ばれたわけだね。うん。正直に言えばこの時から嫌な予感はしてたんだ。

で、ユウくん、コウタ君、バカノンちゃん、僕の四人でミッションに行つたわけだけど…。

コンゴウ2体にシウウの計3体の乱戦とかね。聞いてない訳だよ。

しかもバカノンちゃんの誤射でまず僕が一度戦闘不能になり、僕をリンクエイドしてくれたコウタ君がバカノンちゃんの誤射で戦闘不能になり、そしてバカノンちゃんが戦闘不能になるというね。

その後は僕がコウタ君をリンクエイドして、三人で戦う訳だけど…。

ユウくんが戦闘不能になり、コウタ君が戦闘不能になり、僕以外が地面ペロペロになった光景を見た僕は思い出したんだ。そういえば、難易度無印だったっけ、と…。油断すれば死ぬ。油断しなくても死ぬ。

餌に行つた時に轢かれれば死ぬし、ガードしたって覚悟とかふんばりとかのスキルがないと死ぬ。

そしてやたら向こうはタフだし死なないし…。

そう、僕らが生きてるのはそういう世紀末なんだ…。

その後はスタン↓ユウくんリンクエイド↓回復錠↓スタン↓コウタ君リンクエイド↓回復錠の順で復帰したけど、ユウくん、コウタ君が二人とも地面ペロペロになるのがこの後もう一度あった。

しかも二人とも、戦闘不能になればなるほど動きに精細を欠いていくし…。SAN値チェックじゃないんだぞ。正気度ロールなんかしてる場合か。

ユウくん、リンクエイドした後に捕食するように言ったのにその場でくるくる回ってるしさあ…。

そしてコンゴウ2体とシウウをなんとか制限時間内に倒し、ミッションから帰還した後のカノンちゃんの第一声はこちら。

『どうして私を助けてくれなかったんですかあ…』

涙目で言われても、あの時の最善は間違いなくカノンちゃん放置で

ある。普通は

『今回は皆さんにご迷惑をお掛けしました…』

とか

『あまりお役に立てなくてごめんなさい…』

じゃないの？ねえ？

ということで、カノンちゃんに今回の問題点を懇切丁寧に一から伝え、偶然通りかかったツバキ女史に今回のミッション内容をざっくりと報告した。

カノンちゃんは一ヶ月みっちりツバキ女史から戦闘訓練をやらされることになった。残当。

コウタ君も

『まあ、今回のはさすがに…』

って感じでフォロー出来なかったようだ。

ちなみにユウくんは、コウタ君に

『な、あんたはどう思う？』

って振られた時に肩をすくめるだけだったので、彼としてもこの処分は妥当だと思ったようだ。

ミッションでは久しぶりに命の危機を覚え、ミッションから帰ってからはわがままっ子にお説教をするはめになり…。

あまりの精神的疲労感から、ロビーのソファーにそのままバタリと倒れてしまったんだった。

僕の話静静地に聞いていたジーナたんは、僕が話し終わると軽くならずいて、

「…お疲れ」

と言ってくれた。ああ…。心が浄化されていくようだ…。

「いや…。こちらこそ、聞いてくれてありがとう。少し、気分が軽くなったよ。」

そういえば、そっちは今日はどうだったんだい？」

そもそも、今日ジーナたんが何をしていたか知らないんじやが。

「こっちは相変わらず、あまり成果はなしね。

：ただ、鎮魂の廃寺に向かったタツミからは少し気になることを聞いたわ」

「…それは？」

ここでいう成果は、リンドウの探索のことだろう。防衛班の通常巡回経路を今拡張する話が出ているし、タツミが防衛班班長として一足早く行動したんだろうか。

それにしても、鎮魂の廃寺か。…まさかシオ、か？

「なんでも、たき火の跡が見つかったらしいの。ただ、リンドウさんの居た痕跡と断定も出来ないし、山賊とか、野盗かもしれないから何とも言えない、って」

「そうか…」

リンドウはタバコを吸ってたはずだし、マッチが見つかればリンドウだという可能性が高そうなんだが。

リンドウか、それ以外か。…個人的な希望でいえば、シオとリンドウとかだと一番なんだが…。

「何にせよ、僕の方でもリンドウを探してみるよ。

…なるべく早く見つけないとね」

ハンニバル化したリンドウと、この無印基準の世界で戦いたくないです。勝てない。絶対一人二人は犠牲者出そうや…。もうやだばくおうちかえるう…。

「そうね…」

沈黙が下りる。

とは言え、ジーナたんとは既に結構深い付き合いなので、気まずいとかはない。あー、ジーナたん相変わらずきれいだなー。まっげ長いなー。とか、そんなくらい。

…そろそろいい時間だ。彼女もシャワーを浴びるなりするだろうし、そろそろお暇しよう。

「…さて、そろそろ僕は行くよ。今日はありがとう」

「どういたしまして…と、言っておくわ」

なんでもないように言うジーナたんだが、こういう気の利いた優し

い部分が僕は好きだ。

「今度はお礼に、僕の部屋に招待するよ」

「期待しないで待っておくわ」

「ちよ、ひどくないかい？それは…」

そう言つて彼女を見ると、いたずらっぽく笑っていた。

まったく、その顔はすごいゼジャーナたん…。



バトルドーム！

「エリック、頼まれてた強化パーツ出来たよー！」

「ありがとう」

神機整備室。

通路の両側にいくつもの神機が林立する、まさしく武器庫そのものの神機保管室の隣にある、工具やら材料やらがあちこちに散らばった、半分リツカの個室となっている部屋だ。

神機整備室の真ん中には四角い木製のテーブルがでかどかど存在を主張しており、リツカはその机に軽く腰掛けながらテーブルに手をついていた。

つい先ほどまで作業をしていたのか、ごつい手袋をしたままである。

そして机の上には、なにやらよくわからない金属製の円柱が。円柱といっても、あまり分厚くない。せいぜい握りこぶし程度の大きさか。：そう言えば今気付いたけど、強化パーツってどこにどう付けるの？

そんなことを考えていると、リツカが説明をし始めた。上手く出来てご満悦なのか、テンションがちよつと高い。あと、どこことなく誇らしげだ。ちなみにこういったタイミングで褒めまくと、ブンブンと勢いよく振られるしつぽが幻視できる。ちよつとしたレアな表情だ。

詳しいな、まるでリツカ博士だ。

残念だけどジーナたん一筋なんだよなあ…。

「これが前頼まれてた強化パーツ。

仕組みとしては、神機と神機使いが接続する部分に組み込むことで、オラクル細胞の循環効率を上げるの。

とは言っても、ただ循環効率を上げると神機使いの身体にいつも以上に負担がかかっちゃって、使い物にならない。

だから、この強化パーツの真の心臓部分はウロヴオロスの素材。他の素材との相性があるから特定の部位じゃなきゃダメで、かつオラクル細胞を生み出す働きとその補助を担うんだ。

あとは、負担軽減のために伝導率を上げる必要があったから、伝導体をまるまる二つ分。これを、全体に特定の分布で組み込むんだ。

自分でも、上手く出来たよ。だから、当初の目標よりも性能が良くなってる。はいこれ」

そう言つて手渡された強化パーツは、けっこうずつしり重かった。2kgくらいありそう？

「ありがとうリツカ。やっぱりいつもひたむきに神機に向き合っている君に頼んでよかったよ」

「そうかな…。へへっ、ありがとね」

につ、と笑いながら鼻の下をこするしぐさが実にキュートである。あつ、そんな機械油だらけの手袋したまま鼻をこすったりしたら…！

「あつ…！」

リツカも気付いたらしく、恥ずかしそうに顔を赤く染めた。そうだよね。機械油つてけっこう臭うよね。

「ほら、これ」

すつ、とエリックがポケットからハンカチを取り出してリツカに差し出す。うーん、このあたりはエリックつて本当に育ちがいいんだなあと痛感する。俺ならここまですんなりとは渡せないし。ちよつと恥ずかしいし。

「や、大丈夫だつて…！」

そう言いながら、えと、えと…！つてキョロキョロしてるリツカちゃん。おそらくタオルを探しているんだろうけど、なかなか見当たらないらしい。ああもうじれつたいなあ。

「わが」

面倒なので強硬手段に出る。あー、これあれだ。

エリックさん、完全に妹のエリナと同じ感覚でごしごししてる。一応リツカちゃんは一ヶ上か同い年のはずなんだが…。ま、リツカちゃんかわいいし。多少はね？

「…よし。まったく、嬉しいのは分かるから、少し落ち着きなよ。

あとこれ、頼まれてた報酬だ」

そう言つて、簡素ながらも丁寧にラップピングされた小さな箱を渡

す。ちなみにこれは、叔母さんから運良く譲ってもらえたチョコレートである。お金を支払うつもりだったんだが、甥っ子から金をとるほど落ちぶれちゃいないと一蹴されました。一応これでもお金に関しては心配はいらないんだが…。

丁寧にお礼を言つて、ありがたく頂きました。

そしてそれをラッピング。

リツカちゃん、なんで普通の甘いものも好きなのに、冷やしカレードリンクも好きなんだろう…。謎。

「わっ、ホント!? ありがとエリック!」

明らかに先ほどよりも嬉しそうなリツカちゃん。リツカちゃんが嬉しそうで何よりです。

「さて、僕の相棒の整備は終わってたかな?」

「わー…♪」

聞いちゃいねえ。早速包装をいそいそと開けている。そんなに慌てなくても、チョコレートは逃げないよ。

「おお…!」

箱を開けると、上品に9つに区切られた中に、一口サイズの芸術品のようなチョコレートが仕舞われていた。リツカちゃんのおめめがキラキラしてるう…。

「ね! ね! 食べてみてもいいかな!」

「どうぞ」

「わーい! どれにしようかなー…♪」

ふんふーん♪と上機嫌に鼻歌を歌いながら迷っているリツカちゃんを尻目に、僕はコーヒーマーカーの置いてある部屋の奥へと向かった。

これはしばらく待つしかなさそうだ…。

…この強化パーツの名前は、上田オリジナルにしよう。

コーヒーを飲みながら、幸せそうなリツカちゃんの顔を眺めつつ、僕はそんなことを考えていた。

ワニをしている

ロビーのターミナルを操作していると、アリサちゃんが少し回復したらしいことを聞いた。うーん、このあたり、どうなったかあまり覚えてないんだよね…。

まあ何にせよ、僕は僕の出来ることをするだけだ。

「…っと。出来た」

そう。

ついに！

おめでどう！20型ガッツト真は、28型ガッツトに進化した！（ポケモン感）

ちなみにステータスはこんな感じ。

20型ガッツト真

破：×2. 3

貫：×1. 3

火：×0. 5

氷：×1. 7

雷：×1. 9

神：×0. 5

スキル

スタミナ←小

ノックバック距離←小

←←

28型ガッツト

破：×3. 0

貫：×1. 3

火：×0. 5

氷：×2. 5

雷：×2. 5

神：×0. 5

スキル

スタミナ←小

ノックバック距離←小

ついに。ついに、氷と雷が2倍を越えた！

いやあ、無印基準の難易度4〜6を、盾による防御なしの低耐久紙装甲で、武器がランク3とかいう地獄を乗り越え、ようやくランク4の武器まで来ました！つらかった…。

むしろこれまでの二年間、20型ガットのままでよくエリック死ななかつたな…。というレベルである。腐っても、極東の神機使いか…。化け物だらけだな、極東。

「ん？」

ターミナルの操作を終了するつもりでいたが、ふと新しくメールが来ていることに気付いた。はて。ブレンからの成果報告については確認したはずだが。

そう思つてメールボックスを開くと、父さんからだった。ついに倒産したか…。父さんだけに。

や、まだメール見てませんけど。

「ああ、そうか…」

内容は、リンドウが死んだ（という扱いに極東ではなっている）ため、父さんがこちらに一度来る、というものだった。その時に顔を見せてほしい、とか。

…リンドウの存在は、おそらく父さん達フェンリル傘下の企業にとつても大きな存在だったのだろう。

物資の輸送の護衛、取れるアラガミ由来の素材、卓越した戦闘技術とそのノウハウ…。

特に父さんは僕やエリナの事があるから、向こうの人達の中でも極東とは繋がりがあがる。それも含めての人選だろう。まあ、父さんは選ばれたというよりむしろ選ぶ側なのだが。

…そういうえば、リンドウが居なくなつてから、もう一週間以上経つ。普通に考えれば、生存は絶望的だ。

だが、実は僕はあまり心配していない。だってリンドウだし。

それに、ぶつちやけリンドウが死んでいたとしても、それは無印な

らある意味正史とも言える。仕方ないね。

むしろ自分が明日生きているかどうかの方が心配なまでである。この前みたいに自分以外が新人とかだと普通に全滅しかねないし…。

さて、オラクル自動回復量の上がる強化パーツ、

『上田オリジナル1』も新たな相棒に装備した。回復錠も回復錠改もありったけ持つてる。回復球も回復柱も持てるだけ持ったし、スタングレネードも同様だ。

さあ、今日も張り切って逝きましょう！

ぼるぐ・かむらん

「…で、またこの男くさい面子なのかい？」

「まー、そう言わないで下さいよ。なんか、サクヤさんはツバキさんから話があるらしくって」

「何でもいい…。さっさと行くぞ…」

「…」

やあ皆。今日は僕こと上田エリックとツンツン無口系ヒロインソーマ、あと我らが主人公ユウ君と、おまけでコウタ君の四人でミッションに来ている。

目標はボルグ・カムラン。ヒバリちゃん曰く、

『緊急要請です。「ボルグ・カムラン」が上陸しました！今回が極東での第一例ですね…』

早期の駆除をお願い致します！』

ってユウ君に言ってたけど…。あれ、僕博士のおつかいでボルグ倒しまくってたような…。あれは墮天種の雷だからノーカンのな？

そう思っただけなら、ヒバリちゃんにニッコリ睨まれたでござる。ひえっ。あれは

『余計なことは、言わないでくださいね？』

という脅しだ…。きつとそうにちがいない…。

「さて、今回のリーダーはユウ君…で、いいのかな？」

「…」

さつきからユウ君全然喋ってくれない訳だが。

「まあ、とは言え僕は後衛だし、コウタ君も後衛。ソーマは前衛だから、ユウ君は前衛寄りの遊撃…ってところかな」

まあ、前にこのメンバーで動いた時とあらかた一緒である。つかユウ君、これは君がやることやで？

「そいつに何を言っても無駄だ…。

猪突猛進の死に急ぎ野郎にはな…。集合の合図も、各員索敵の合図も出しやしねえ…」

「あ、ソーマ！何もそんな言い方しなくていいだろ！」

ソーマにユウタ君が何か言ってるが、ソーマに死に急ぎ野郎死に急ぎ野郎って言われるって相当やで…。

「…何か変な事考えてんじゃねえだろうな」

ソーマに睨まれました。なんでそんなに勘がいいのん…？アラガミ化すると、勘が鋭くなるの？僕もアラガミ化するしかないな…。

「さっさと行くぞ…」

「あ、おい！ソーマー！」

あ、ソーマが痺れを切らして行ってしまった。

やれやれ、僕達も行くでしょうか。…つと、その前に。

「ユウ君、アリサ君の容態は…？」

そう問いかけると、ユウ君は黙って首を横に振った。復帰はまだ出来そうにない、か…。

「なら、アリサ君と話は出来たかい？」

そう聞くと、今度はしっかりと頷いた。ってことは、感応現象はもう起きた後か…。

「…ユウ君、彼女もまた、僕達と共に戦う仲間の一人だ。アリサ君のことで、よろしく頼むよ」

そう言うと、彼は頷いた。…いい目をしている。これなら安心かな。

僕は肩をすくめて、ユウ君と共に二人を追いかけた。

「いやー、意外と楽勝でしたね！帰ったらバガラリー見るぞお！」



「あつっう…」

場所が地下鉄なので暑いのはなんの。ソーマはよくフードなんかかぶっていられるなあ…。なんて。

呑気に考えていた時だった。

「…」

ソーマがじつと黙っている。恐らく原因は、先ほど僅かに聞こえた足音だ。一瞬間聞き間違いかと思ったが、ソーマが警戒しているってことは間違いはない。

僕はコウタ君とユウ君に静かにするよう人差し指を口に当てて、じつと耳を澄ます。

「ソーマ…」

「ああ…」

こういう時、ソーマは僕の言いたいことを理解してくれるので助かる。

ズン……。ズン……。ズン……。

一定の間隔で聞こえる足音が、徐々に大きくなる。…さつきまでの戦闘音を聞かれていたか…？

だが、大分時間が経ったはずなのに…。

そう考えた瞬間。

ゾクリと肌が粟立った。来る！

「ソーマー！」

そう叫んだ瞬間、グアアアアッ！という独特な咆哮が響き渡った。

馬鹿な、あれはハガンコンゴウのー！ー！ー！

そう頭では考えながらも、身体は直ぐ様音の発信源から距離を取る。そして直ぐ様聞こえてくる、アラガミの走る音。くそっ、通信も今は何故か聞こえない！かくなる上は…！

「全員戦闘準備！来るぞー！」

そう叫んだ時には、ソーマはもうハガンコンゴウに向かって駆け出していた。

くそ、乱入なんてゴッドイーター2からだろう!?

まさか支部長の差し金か、とも思ったが、それなら何故このタイミ

ングで…？

なににせよ、今はコイツを片付けるのが先決か！

僕達は、ハガンコンゴウに襲いかかったーーーーー。

「いやー…。ほんと、どうなるかと焦ったよ」

帰投するヘリの中、コウタ君が脱力しながら呟いた。正直、同感だ。あの後、ハガンコンゴウを倒す直前くらいに通信が回復していることに気付いた。ヒバリちゃん曰く、ボルグを倒したか分からないまま通信不能に陥り、今まで復旧にかかっていたとのこと。

タイミング的には、僕達がボルグを倒す少し前から通信が出来なくなっていたみたいだとソーマが教えてくれた。

僕達の通信機器に不具合が同時に発生したのか、アナグラからの通信に問題が発生したのかは分からないらしい。これからリツカちゃん達整備班が調べることになるんだろう。

ふと、ヘリの窓際の座るソーマが考え事をしているのに気付いた。ところで何でキミ地べたに座ってんの？

「ソーマ」

「……………なんだ」

気付くのおっそ。とはいえ、声をかけられた事に気付かなくても、僕がソーマの顔を見ているだけで話しかけられたのだと分かるのはある意味凄いかもれない。

「今回の出来事、どう思う」

「…さてな。ただ、偶然じゃねえ事だけは確かだ」

そう問いかけたが、ソーマはそう言ったきり、顔を反らしてしまった。ソーマはヘリの窓から、じっと空を見ている。

…なにやらキナ臭い。いや、それも今さらか。

一つだけ分かるのは、支部長が黒幕だということだ。

…それだけで十分な気がしてきた。

## しもんきん

驚いた。

何が驚いたって、ユウ君だ。何あれ。

今は確か、サクヤさんの部屋に向かったはず。：サクヤさんの部屋に行くイベントなんてあったっけ？もう覚えてない部分とかあるなあ…。

まあそれはともかくユウ君だ。

空中で捕食するわ、ステツプしながら捕食で吹っ飛んでいくわ。たまげたなあ…。

そういえば、ソーマもなんだかやたら空中で滞空時間が長い時があるし…。なに？どうなってるのこの世界。

俺の知ってる極東と違う…。

更に言うなら、ヒバリちゃんがユウ君にアンケート調査をしていたり、あの人を遠ざけまくるソーマがユウ君と一緒に休憩していたりと、俺の知識にない事はよく起きている。まあ、ただ単にゲームでは描写されなかった部分なのかもしれないけどね。しかしヒバリちゃんと至近距離でお話とか。ちょっと羨ましい。

ただ、その瞬間を見つけたタツミの反応は見物だった。いつも通りヒバリちゃんに話しかけようとした瞬間、固まったからね。つい顔に落書きをしてしまった。

タツミが再起動した後には正座させられた上にこっぴどく叱られたが、僕は満足だ。大☆満☆足！チーム満足。こんなんじや…満足出来ねえぜ…。満足街編は笑わせてもらいました。満足先生の満足はこれからだ！

満足という文字がゲシユタルト崩壊してる…。

しつつかし、こう自分の記憶と違う部分が出てくるとなると、マル犬やキュウビといった、2以降のアラガミの目撃例がないか確認しておいた方がいいかも知れない。まあ、順番的にはツクヨミやアマテラス、スサノオやらヘラやらポセイドンやらゼウスやらの方が先だと思っうけど…。ポセイドンでどんな奴だったか、あんまり覚えてないんだ

けどね。ダウンロードコンテンツかなにかだったはずだし。ヘラとゼウスはまだ覚えてるんだけどなあ。

さて、今回は実はですね。久しぶりに博士にお呼ばれしています。何が出るかな、何が出るかなとお。

「邪魔するよ」

おつ邪魔あーっ！って言って入るつもりだったのが、エリック的な感じに直されてしまった。くそう、なんでや。夜食を食べる時に『うおおん』は大丈夫だったのに……。煮込み雑炊一つください！この世紀末でも雑炊がありました。煮込み雑炊はなかったけど。

「やあエリック君。待ってたよ」

相変わらずの胡散臭い張り付けたような笑み。いまいちセンスのよく分らないズボン。あとメガネ。

皆の便利屋、ペイラーこと榊博士その人です。でたあ（大山のぶ代声）。皆のドラえもん。今声優さん違うけども。僕はのぶ代さん世代ですが何か？

「さて、君にはいくつか聞きたいことがあつてね？」

ふむ。僕の華麗な戦うテクニクについてかな？いいだろう。無印のストーリーを最後まで進めた人間がガチれば、大体の修羅場は乗り越えられるということを教えて差し上げよう！

「まず一つは、最近のミッションで気付いたことはないかい？例えば、戦っている最中にどこかから視線を感じる、とかね」

……。シオのことかな？（直球）

でも視線とか、ソーマレベルの勘の良さでもない気付いけて。ふむ。あつ。

「そう言ったことはあまりないが……。以前のミッションで、突然通信機器が繋がらなくなることがあった。

博士も、この部屋なり、後ろのよく分からないスペースなり、突然電源が落ちても問題ないようにしておくといい」

確かそれでシオの存在がバレたことあったよね。無かったっけ？

「それについては心配いらないよ。この部屋の機器には特別に、非常用の電源があるからね」

「…何を考えているにせよ、電源が落ちた時の対策はしつかりしておくことをおすすめるよ」

さすがにこれ以上言おうと怪しまれそうだし、こんなところか。まあ、博士だから多分途中で気付いてくれるはず。…気付いてくれるよね？ね？

この人の場合、『あ！しまったあああ！』とかありそうで怖い。まあそうなればなっただで原作通りだから、ある意味問題ないっちゃない。『…ふむ。それにしても、通信機器の不調か。…おかしいな、あれは私とリツカ君で開発したものだから、そうそう通信が出来なくなるなんて、『有り得ない』はずなんだ。

また後で、リツカ君から詳しい話を聞いておくことにするよ」

「よろしく頼みます」

あれはさすがにちよつとビビった。

ゲームならともかく、現実だと当然帰投する準備やヘリの用意なんかもある訳だ。これが出来ない、いつアラガミに襲われるか分からない状態で待つことになる。時間いっぱい無限湧きの敵を倒すミッションみたくなってしまう。

あれはそういうミッションとしてじゃないと、回復が足りなくなつてキツイのです。ああ、プラーナ欲しい…。それもバーストしなくても体力回復できる感じで…。

「さて、二つ目だけど…。

まず君は、エイジス計画は知っているね？」

「島作ってますね」

後半のミッションではよくお世話になるエイジス島である。何もアイテムが落ちてないので、敵をボコるのに集中出来る反面、あまり広い場所ではないので乱戦だとけっこうツライ場所だ。無印ならかなり死にやすい場所である。まあこれは、無印の後半かつエイジス島に出るアラガミが強い奴多すぎ問題なだけだが。

そういえばふと思ひ出したけど、グボロって超遠距離からぶっぽとか2からじゃなかった？前に緊急依頼やったらなんか飛んで来たんですけど…。

「そう。エイジス計画の肝となるエイジス島だね。今現在、供給される資材の一部を回して建設されている最中な訳だけど…。」

ここまで言って、博士はずいっとこちらに顔をつきだして来た。チエンジ！チエンジで！ジーナたんを代わりに希望する！断じてこないいい歳したおっさんはノー！

「…君は、怪しいとは思わないかな？」

「いいからまずは顔を離して頂きたい」

マジで。

「ああつと、ゴメンゴメン…。少し、興奮してしまつてね…」

おっさんが興奮とか誰得…？

「供給される資材の量。フェンリル本部からも輸送されていることを考えると、私達が貯蓄に回したくなるくらいの莫大な量だ。当然、それに見合うくらいの予算もつき込まれている…。」

「だけど、それに反してなかなかエイジス島の敷設は終わらない。」

「…おかしいと、思わないかな？」

「…なるほど。つまり博士は、こう言いたいのだろう。」

「…資材の一部が、何処かに消えている？」

「そう言うと、博士は出来の良い生徒を見るような顔で微笑んだ。」

「…名答。もしかしたら、ヨハンは…。」

いや、まだ情報が足りていないから、余計な事は言わないでおこうか。変に先入観を持ってしまおうといけないからね」

「そこで止めるのかよ…。」

まあ、支部長がやろうとしている事。つまりアーク計画を既に自分は知っているから別にいいけど。これ、何も知識ない状態でやるとくっそ胡散臭く見えるよね…。」

「実はこいつが黒幕じゃね？的な。もしくは支部長の敵かコイツ？みたいな。」

「さて、長くなつてしまつたがこれで最後だ。」

「搜索を依頼していた、人型のアラガミ…。見かけたりしていないかな？」

「だからシユウならそこいらにたくさん居ます」

「キミは本当にそのネタが好きだね…」

もうすっかりいつも通りの博士に戻っている。

うーん、すっかり人型のアラガミねえ。

ま、とりあえず言えることは。

「贖罪の街、鎮魂の廃寺」

「うん？」

「人型のアラガミ、でしょう？それなら、人と同じように移動すると考えて、隠れる場所のあるこの辺りが怪しいんじゃないですか」

知らんけど。

まあ、知識と記憶を頼りにした場所に、適当な理由を着けただけだが、案外的を射た意見ではなからうか。

「…なるほど。確かに、そう言った考えは重要かもしれないね。」

ありがとう、今回の用件はこれで全部だ。

引き続き、人型のアラガミを見掛けたら、報告を頼むよ」

「ふっ、全てはこの、華麗に戦う僕に任せておきたまえ…！」

そう言つて突如立ち上がり、ファサツ…。と髪をかきあげるエリツク。本当にこれがなければ良い奴なのになあ…。でもエリツクだからこれで良いっちゃいい。

少なくとも、2で助走をつけて殴られる、ポラーシユターシンの主人我が盟友よりはマシだ  
と思う。いいやつだったよ…。

さて、ところでアリサの復活まだかなー。



## 夏の日の思い出

「お兄ちゃんーん！」

「ん？」

いつも通り、ジーナさんと共にけっこう時間がかかりつつも、一度も死ぬことなくグボロを解体した帰り。

ゲートをくぐってロビーに入ると、愛しい妹の声。はて？何故に？

そう思っていると、たたたと階段を上ってくるエリナの姿。お兄ちゃんはどこだ！エリナー！

「きゃーん」

かわいい声を上げながら勢いよく抱きついてくるエリナを全身で受け止める。ああもうエリナはかわいいなあもう！

「…その子がエリックの妹さん？」

ジーナがエリナを見つめながらこちらに問いかけてきた。心なしか、若干普段僕を見る目よりも優しげな気がするの、気のせいかな？その優しさを僕にもください。

「そうだよ。…さ、エリナ。」

彼女はジーナ。僕の頼れるパートナーだ。ご挨拶なさい  
「うう…」

エリナにそう言うも、エリナは僕の身体の陰に隠れてしまった。

「ジーナ、エリナはシャイなんだ…」

「…」

そう言っ僕は肩をすくめた。こればかりはなあ…。

エリナは僕の背中からぴよこりと顔だけ出して、ジーナを見ている。

すると、ジーナがそっ…とエリナに近付いて、エリナのそばでしゃがんだ。

「…私はジーナ・デイキンソン。貴女のお兄さんの仲間よ」

「ジーナ、さん…？」

「ええ」

そう言つて、ジーナは優しく微笑みながらエリナに向かつて聞いた。

「貴女のお名前、聞かせてくれるかしら…?」

ジーナさん、その笑顔を普段の僕にも分けて下さい。

そんなことを考えながら、エリナがおずおずと、ジーナと話し始めるのを見ていたところ、非常に聞き覚えのある、しかしうざったい声が響きわたった。黙るフォイ!

「久しぶりだな…。友よ!

今ここに!君の盟友!エミール・フォン・シユトラスブルク、華麗に見参!」

声が出た方を見ると、無駄に洗練された無駄のない無駄な動きでこちらに近づくエミール<sup>変態</sup>の姿があつた。

うわあ…。正直、あんなのと同類に見られたくない…。きめえ…。なんだそのぬるぬるした動き。

「…というかエミール。何故君がここに…?」

まだお前、ゴツドイーターちやうやろ。見た限り腕輪もないし。そもそも貴様の登場はあと三年後だ。僕とジーナが結婚してから出直してこい。

「友よ…。君は、自らが言ったことをもう忘れてしまったというのか…。」

あれほど熱心に僕に頼んでおきながら、記憶にないというのかあ!?!」

うぜえ。あと暑苦しい。

そもそも、エミールに頼んだ記憶とか俺にもないしエリックにもあまりない。なんのこっちゃ?

あと周りからの視線がすごくツライ。やめて、そんな目で僕を見ないで!僕はこのなのと同じ扱いされたくないです!ン拒否するう…。

「…君は、エリナのことをよろしく頼むと僕に言ってきたらどう?しかもその後すぐに極東に行くわ神機使いとして活躍し出すわ…。少しくらい、連絡をくれても良かっただろうに!」

眉を八の字にしながらそう言うエミールだが。エリックの記憶と



そう言うエミールは険しい顔をしていた。

そう言えば、エミールもエリックも故郷のドイツでは貴族階級高等学校に通ってたんだよな。

策略、権謀、利権、裏切り……。そういったものは、ある意味隣人でもある訳か。すつとそう思い当たるといのはまあ、そういうことなんだらう。

やれやれ、人類は未来永劫そういう宿命なのかね……。

「……あまり大きな声では言えないが、エイジス計画についても、どうやらキナ臭いものがありそうでね。はてさて、どうなっているのやら、だ」

俺がそう呟くように言うと、エミールはやけに良い姿勢で顎に手を当てて考えだした。……多分これ、本人はただの考え事してるだけのつもりなんだらうなあ……。

「……エイジス計画か。それについてだが、友よ」

「なんだい？」

「フエンリル本部からも、資材の供給が行われているのは知っているか？」

「ああ」

この前博士にも聞きました。なに？それそんな大事なことなん？

……ここ、テストに出ます。的な。

「フエンリル本部も、この極東支部と同じく、内部居住区の周りにアラガミ装甲壁を張り巡らせている。そして、外部居住区にもアラガミ装甲壁を張り巡らせようとはしているが……いかんせん、資材が足りておらず、神機使いがせいぜい見回りに来る程度だそうだ」

「だらうね」

それについては、エリックも記憶の中で驚いていた。

故郷ドイツにいた頃、自分やエミールが内部居住区の一等地で当たり前のように享受していた安全。それが、ただ単に運が良かっただけであったという事実。そして、いつ襲われるとも分からない、外部居住区で逞しく生きる人々。

……そういつた経験があるからこそ、エリックは神機使いとしてこれ

まで二年間、どれだけ大変であつても頑張つてこれたのだろう。

戦う力の無い人々を守ること。それは、まさに貴族ノブレスオヴリージュの義務そのものであると。

…そう考えると、現場の事については今はエミールよりもエリックの方が詳しいのか。その代わり、フェンリル本部の内部の話となると一気に不透明になるけど。

ま、こればかりはしゃーない。

「…それで、外部居住区の人々が中心となつて、最近デモが発生してきている。」

エイジス計画に資材を回すよりも先に、するべき事があるはずだ、と」

「…治安はどうなんだ？」

「正直、あまり良くはない。」

フェンリル本部も、内部では相変わらずの権力闘争ばかりだ。特に、エイジス計画にはやけに食い付きが良い。恐らく、利権以上の何か絡んでいる、と僕は睨んでいるんだが…」

「…そうか」

エミール、大正解である。

エイジス計画は隠れ蓑であり、実際には限られた人々を宇宙に避難させ、人為的に終末捕食を発生させることで、一度リセットする…」

それが、支部長の思い描いているシナリオであり、アーク計画だ。

…とはいえこれはあくまでも、ゲーム通りなら、という話だが…。恐らく支部長はあくまでも、アーク計画を成就させるつもりだろう。

というか、正直現状を見ている限りでは、どうあがいても詰んでいる。僕の記憶には三年後には人類側もパワーインフレを起こし、なんとかなる兆しがありそうだと分かるゴッドイーター2の経験があるが、支部長にはそんなものないだろうし。

ぶっちゃけ、自分も三年後を知らなければ支部長の考えが間違っているとは思えないだろう。

それくらい、人類は追い詰められながら消耗戦をしている。まさに

崖っぷち。極東は特にひどいけどね…。

「君も気を付けてくれ、友よ。君に何かあれば、エリナ君が悲しむからね」

「気を付けているのはいつもそっか。」

それでもまあ、いつ死ぬかわからない以上はなんともね…」

そう言つて肩をすくめる。やれやれ、極東は地獄だぜ。

そういえば、いつくらいからフライアの計画は出てくるんだろう？

血の雨のこともあるし、一応気を付けておくか…。

「おおエリック。久しぶりだな」

「父さん」

エレベーターから出てくる人影が見えたと思つたら父さんだった。ところで父さんの名前つて…？裕福そうな紳士？

それにしても、険しい顔をしている。ハゲるよ？

また髪の話してる…（・ω・）

「…調子はどうだ？」

「いつも死にかけてるよ」

いや、マジで。

そう言つと、さつきまでの険しいような表情はどこに行ったのか。突然慌てたようにガツと肩を掴んできた。

「何!?この間まで、『華麗に戦う僕の姿、いつか父さんにも見せてあげたいものだよ…!』などと手紙に書いていたではないか！

エリック、一体何があつたんだ!?

…いや、いい。何も言うな…」

そう言つて父さんは、肩を掴んでいた手を放した。

…そういえばそうだった。すっかりエリックになつてから馴染んでいたから忘れてたけど、エリックってそういうやつだったわ。ナルシスト的な。

…妹の気持ちは手紙越しに気づくのに、自分は虚飾にまみれた手紙を書くのってどうなん？ねえエリック？

エリックは俺に、何も言つてはくれない。ゼロかよ。

そういえば五飛のこと、ウーフエイじゃなくてごとびとかごひつて呼んでたなあ…。ごとびのが分かりやすくていいじゃんね。

AK47をエーカーじゃなくてエーカーって読むのと一緒。

100エーカー…プニキ…うっ、ロビカス。

「…リンドウ君が居なくなつたことは、先ほどこちらの支部長…シツクザール支部長からも聞いている。

エリック、あまりにも大変なようなら、いつでも帰つてきて良いんだ…！」

そういう父さんは深刻な表情だが、ぶつちやけ罪悪感しかない。すまない父さん、そういうつもりで言つた訳じゃないんだ…。すまない、本当にすまない…。などというつもりはない！

まあ、それに。

「…ありがとう、父さん。

でも、僕はここで戦うつもりだよ。

『妹が『寂しい、独りぼつちは怖い』と手紙に書いているのに、のうのうと財閥の御曹司やつてるわけにもいかんだろう？』

そう言つて、ニヤリと笑う。そう。

これはエリックが、周囲の反対を全て押しきつて極東に来ることを決めた時の言葉。

妹が、エリナが、この極東に居る間くらいは、ずっと側に居てやらなきゃな。

それが、冗つてもものだろう？

いやー、エリックは本当に死んだ後に味が出てくるキャラだよな。スルメかな？

そう言うと、父さんはふっ…と表情を和らげた。

「そうか…。そうだな。お前は、エリナのために、ここへ来たのだっ  
な…。」

「ええ。」

それに、ここでも僕には信頼できる仲間が出来ました。僕の居場所  
はもう、ここにある。

心遣いはありがたいですが…。」

「いや、なに。構わんよ。」

ただ、これだけは覚えておいてくれ。エリナも、お前も、二人とも  
…。私にとつては、かけがえのない子ども達なのだ…。」

「…。」

それを言われるとキツい。

そもそも、エリックは本当ならもう既に一度『死んでいる』。既に中  
身もエリックではなく、今いるのは俺な訳で。

なんとなく父さん達を騙しているような感じがして、いたたまれな  
くなった俺は、周囲を見渡した。

すると、エリナとジーナがちょうどこちらへ向かってきているのが  
見えた。二人には悪いが、だしにさせて貰おう。

「お兄ちゃん!」

相変わらず、輝くような笑顔でこちらへ向かってくるエリナ。実に  
可愛らしい。そこ、シスコンとか言わない。

「どうだいエリナ。ジーナとは、仲良くなれたかな?」

「うん!あのねあのね、ジーナさんってすごい!えつとね…!」

エリナが元気に話し出したので、しゃがんでエリナに視線を合わせ  
ながら、頷きながら話を聞く。

一通り話すと満足したのか、自分の脚に思いつ切り抱きついてき  
た。こうなると、エリナが満足するまで放っておくしかないみたい  
だ。仕方ないか…。」

「エリック」

「ああ、ジーナ。ありがとう、この子の相手をしてくれて」

「ええ。彼女、とつても良い子よ。…愛されてるわね、エリック」

どうやらジーナはエリナから、僕の話ばかり聞いていたらしい。ま



あ、二人が仲良くなってくれたようで何よりだ。

「ところでエリック。そちらのお嬢さんは…」

すっかり父さん達のことを忘れてた。…エミールはあちこちに歩き回ってほうほう言っているようだし、放置でいいかな。

「紹介するよ。彼女は僕のパートナーのジーナ。頼りにさせてもらってる。最高に魅力的な女性だよ。」

ジーナ、僕の父さんだ。最近、髪の毛の生え際が気になってきたお年頃「エリック、初対面のお嬢さんに私の気になっていることをあつさりばらすのはやめなさい」

「…初めまして、ミドル。ジーナ・ディキンソンです」

「ああ、初めまして。いつもうちの『バカ』息子をご迷惑をおかけしています…。何か失礼なことをした時は、遠慮なくひっぱたいてやってください…」

失礼な。

そう思っていると、ジーナたんがこっちに顔を近付けてこっそりと言ってきた。

「…あんた、父親にまでバカって言われてるわよ？何かしたの？」

「いや？いつも通りさ」

「…だから、ね」

なんやとこらあ！今のニュアンスだと、いつもの僕がまるでバカみたいだと言う感じじゃないか！訂正を求めるぞ！

「…エリックは確かにバカですが、頼りになるときもありますから」

「いやはやお恥ずかしい…。やはり息子は、相変わらずこちらでも皆さんにご迷惑をおかけしていますか…」

「よくトイレを詰まらせてはいます」

「ああ…。頑張って教育したんですけど、まだやりますか…」

あれは俺のせいではない。

ちゃんと拭けたか不安になるあまり、ついつい五回も六回もふきふきするエリックが悪い。俺はこれまで生きてきた中で、エリックみたいに詰まらせたことなんて一度もないんやぞ！

んふー…♪と、僕の脚に頬を押し付けてご満悦なエリナの頭をなで

なでしながら、僕はジーナと父さんが何やら僕のこと盛り上がって  
いるのを複雑な心境で眺めていた…。

俺は詳しいんだ

おはよう諸君。俺はエドワード・エルリック。弟のアルと一緒に生活している国家錬金術師だ。彼女はウィンリイ・ロックベル。可愛い彼女さ。

好きなものはカップラーメン。嫌いなものは湯を入れてからの三分間。あと勘のいいガキ。勘のいいガキは嫌いだよ……！

そんな俺達は、極東にあると言われる、『神の住む地区』を目指して旅をしていた。

はい。皆さんおはようございます。茶番です。

今日も快眠できました。エリックこと上田です。

さて、今日は実はジーナがカノンちゃんと共に射撃訓練に行っているため、一人である。うーん、あまりやる気がわかないなあ……。

タツミやブレندانはカレルやシュンと防衛班の経路巡回。第一部隊はこの前クアドリガの討伐に行つて今日はどうなんだろう。知らん。

そのタイミングで僕はリツカに制御パーツいらないから強化パーツ2つにして、とお願いしに行き、強化パーツは最初から2つつけられるはずと言われ、でもやっぱり無理だったからリツカに見てもらい、リツカもあれ？と首を傾げてなにやら神機を弄り始めたりしたのだが……。まあ、それはまた別の話。

とりあえず、ヒバリちゃんの元へ行き、ソロでもパフエれる相手で

もぼこつてこようかなー、なんて考えながらエレベーターに乗った。今日も僕のガツトが火を吹くぜ…！

そしてロビーに出たところで、なにやら話し声が聞こえた。何だろう。

モブA「おいおいおい、聞いたか。例の新型の片割れ…。やっと復帰したらしいぜ」

モブB「ああ、リンドウさんを新種のヴァジュラと一緒に閉じ込めて、見殺しにしたヤローだろ」

モブA「ところが、あんなに威張り散らしてたくせに結局戦えなくなったんだってさ。ざまあないぜ！」

モブB「はははっ！結局口ばかりじゃねえか！」

そこまで聞こえた瞬間、僕の中で何かが弾けた。s. e. e. d. : ?うっ。

なおも話を続けているモブAに向かって、僕は駆け出した。右拳は引き絞って肩の上。左手は真っ直ぐ前に。

死ねえっ！

「上田パーンチ！」

「アバーツ！」

ゴウランガ！

僕の右手はモブの顔面を抉り飛ばし、モブAの体は勢いよく飛んでいった。

そしてそのまま、ポカーンとした顔をしているモブBの左腕を取る！

バツ！

バツ！！

ギユッ

「があああああああつ！」

「豚肉炒めと、ライス下さい！」

アームロック！！

そう。これこそは、ライカ叔母さんの友人の怪しげな個人貿易商、

井之頭ゴローさん直伝!

井之頭流交渉術! 頭を冷やせ!

「あ…そこまで!」

カウンターからヒバリちゃんの声が聞こえる。きつと今ヒバリちゃんは、いつの間にかメガネを掛けていてこちらを止めようとして右手を挙げながら声を掛けているに違いないー。

なんて思っていた瞬間、頭が割れるような痛みに襲われた。

「ぐあああああつ!」

「エリック、お前何やってんだ…。つたく」

思わずアームロック!!を放して振り向くと、いつの間にか久しぶりに切れちまったよ…! 顔をしたらタツミがそこに立っていた。くそつ、頭が、頭が割れるように痛い痛い…!

「むかついたから殴<sup>なぐ</sup>アアアアツ!」

「俺もムカついたから殴<sup>なぐ</sup>った。すまん」

く、くそつ…! 人が喋っている時に上からグーで殴るな! 舌噛みきつちゃうかもしれないだろ! タツミ貴様…! 許さんぞ…! 許さない、絶対にだ!

あまりの痛みに床でのたうち回りながら悶絶していると、そつと誰かが胸のあたりを触っていた。ヒバリちゃんだ。

「あの…。エリックさん、大丈夫ですか?」

ああくそ、ヒバリちゃんに心配してもらえとかめちやくちや羨ましいくらいのご褒美なのに…っ! 今は痛みでそれどころじゃないっ…。くそ、タツミい…!

「こ、氷を頼む…」

頭のとっぺんが燃え盛るように熱くて痛い。頭割れるウ…。

「は、はい!」

「ああ、それは俺が行こう」

「それではブレンダンさん、お願いします」

「ああ」

僕が床でビクンビクンしている間に、外野が何か言っているみたいだがそんなことより頭が痛い…! くそ、タツミめ…。逆恨みとは

分かっていても、この恨み晴らさしておくべきか……いや、許さん！  
そう思ってからふとタツミを目で探すと、モブ二人の肩に腕を組んでいた。へっ、やーいお前の大好きなヒバリちゃんは今俺の背中に手を当てて支えてくれているぞ。どうだ羨ましかろう。ヴアカメ、と言つて差し上げますわ！

「タ、タツミさん……！」

「よう、お前ら……！」

まったく、見回りから戻ったと思ったらエリックのバカが思いつきり助走をつけて殴るところが見えたから止めたが。そのバカが胸を張つてムカついたから殴つたとか言うわ、こいつらは俺の姿を見て、びびった様子を見せるわ……。何やってんだ……。

確かこいつらはこの前新人からようやく一人で戦えるようになったばつかつてところのはずだが。俺も何度か任務に連れていったから覚えている。

エリックに腕を捻られてたやつ肩に腕を組み、殴り飛ばされた奴も左手で引き寄せてぐいと近付ける。

「さて、エリックのバカがバカやったのには、また俺から処罰喰らわせるとして、だ……。

あいつはバカだが、何も考えなしに手を振るうような奴じゃねえ。

お前ら、一体何してた……？」

俺が周りの奴らに聞こえないようにボソボソ言うと、右の青い服し

た奴は震えだした。左の赤い服の奴は首を何度も横に振っている。

…ふうん。言う気はねえ、つてか。

「…今から素直に答えるなら、特別にお咎めなしで離してやる。あのバカにやられた分もあることだしな。」

…だが、答えねえならてめえらにも拳骨だ。後でヒバリちゃんに何があつたか全部聞くから、そうなたら言い訳は聞かねえぞ…」

「…す、すみませっ…」

「な、何も…してないっす…」

右の青い奴はガタガタ震えながら謝ってきてるが、左の赤い奴はなおも言うつもりはないようだ。…コイツには、後でツバキさんに訓練からやり直すように言っとくか。上官に詐称は重罪だ。

「…す、少しだけ…わ、悪口を…っ！」

「…ふうん？」

「お、おいバカ…」

青いのがついにゲロった。さて、全部言ってもらおうか…！

「し、新型が…口ばかりつて…言ってみました…」

「バカ！黙れ！」

「…黙るのはてめえだ…。おい。続ける…」

そう言くと、青いのは首を横に降った。

…どうでもいいが、この赤い奴はツバキさんにフルコース頼むか。死なないようにだけしてもらわないとな…。

「そ、それだけです…！…本当です…」

「…なるほどな…。てめえらは、いつか背中預けて戦うことになるかもしれないねえやつの悪口言ってたのか…」

…エリックの奴がバカやってるから、どんな理由かと思つたが…。そうか…。

「…お前らは、こんな人の多いところで、周りに聞こえるような声量で、いざと言うとき共に戦う奴の悪口を言ってたと…。そう言うんだな？」

「…す、すみませ…っ！」

「お、俺は言っていないですよ！…本当です！」

「お前はちよつと黙れ。そうか…。

…まあ、お前らの気持ちも分からんでもない。ただ、もうちよいT  
POを考えろ。…な？

あー、お前は離してやる。さっさと行け」

そう言つて、青いのを突き飛ばす。

「…お前は菌あ食いしばれ」

「俺は何もー…ガツ…」

赤い奴は左手で胸ぐらを掴んで拳骨を勢いよく降り下ろす。こんな奴でも人手が足りねえから使わなきゃならないが…。それはそれとして、教育は必要だ。

「上官に詐称するのは問題だ。…例え、お前が言っていたことがどれだけ共感出来ることでも、何もしてないはねえだろ…。

ほら、おまえもさっさと行け」

「くっ…：…すんません」

ボソツと小さく溢しながら、右手で頬を抑えて赤い奴もエレベーターに勢いよく走つて向かっていった。…そんなにエリックに殴られた方が痛かったのか…。

さて。あとはあのバカ<sup>エリック</sup>だけだな。

ブレンが持つて来てくれた氷のうを頭の上に手で押さえながら、僕は床の上に座りこんでいた。そつと背中を支えてくれるヒバリちゃんの優しさが心に沁みる。くそつ、タツミの奴め…。めちやくちや痛い。まだ頭がジンジンする。くそつがあ…。



僕のすぐ左側に立っているブレンと共にタツミを待っていると、モブAとBを解放して戻ってきた。

「さて、エリック…。申し開きはあるか？」  
ないな。

それゆえ、僕は胸を張ってこう答えた。

「カツとしてやった。反省も後悔もしていない！」

「反省しろバカ」

しゃがんでこちらを見つめるタツミがビシツ、と勢い僕の頭にチヨップした。

「ぐあああああ…っ！」

いてえ！せっかく痛みがひいてきたのに、また頭頂部が痛みと熱く燃え盛りでした。いつか見てろよ…！

「ったく…。なんでこう、リンドウさんが居なくなつて大変な時に更に揉め事起こすかね…」

タツミはそう言うがな。そもそもの話、僕の居るタイミングでアリサちゃんのことをdisる奴が悪い。まあ、手を出したのは僕に問題があるが…。

「あいつらがアリサちゃんのことを明らかに悪く言つてたからな」

「ちつとは反省しろバカ」

「むう」

僕が唇を尖らせていると、意外なところから援護が入った。

「まあ、タツミもそこまでにしてやれ。エリックのしたことは間違っているが、エリックの気持ちも分かる」

「ブレン、お前は甘やかしすぎだ。規律や規範が何のためにあると思ってる」

「それを毎日ヒバリちゃんに迷惑かけてるタツミが言うのか…」

つい思ったことが口に出た。そしたら、ブレンからは呆れた視線を、タツミからは睨まれたでござる。さーせん。

「エリック、今お前が言ったことは正論だが…。それを今のお前が言つちやダメだろう…」

正直すまないと思つている。

「そうだぞエリック。それに、俺がいつヒバリちゃんに迷惑かけたつて言うんだよ。なあ？」

そう言つてタツミはヒバリちゃんの方を見る。僕もつられてヒバリちゃんの方を見る。

すると、ヒバリちゃんは僕の目を見た後でタツミの表情をちらつと見て、すつと視線を逸らした。……タツミエ…。

タツミの方に視線を戻すと、ちよつとショックを受けているようだ。小さく、え…？と言ふ声が零れる。タツミ、哀れなやつめ…。

そんないたたまれない空気になつていた時に、上の階段から複数人の足音が聞こえてきた。

「あの一、さつきから騒がしいっすけど、大丈夫ですか？」

階段から覗きこむようにこちらを見ていたのは、コウタ君、ユウ君、そしてアリサちゃんだった。……まさか全部聞かれてたりしないよな…。

「あー、大丈夫だ。エリックがバカやっただけだから」

「やあ、バカ代表のエリックです」

「や、全部聞こえてたんで知ってますけど」

タツミがなんでもないので言つたので、僕も爽やかに左手を挙げてお茶目な自己紹介を試みたのだが、どうやら全部聞かれてたようだ。

聞かれてたのかよ…。

「あー、まあじゃあ分かるな？お前らが気にするようなことは何もない」

「そうそう。何も、ね」

タツミがさりげなくフォローしたので格好よく歯をキラーンときせて追従してみたのだが、三人を微妙な顔にさせるだけで終わった。ふうむ。このイケメンフェイスは彼らには刺激が強すぎたか…。

「ま、よく分かんないっすけど、あまり気にしないことにします。

二人とも、戻ろうぜ」

コウタ君がそう言つて腕を回すと、ユウ君とアリサちゃんは頷いて上に戻つて…？

いや、アリサちゃんだけこちらを見ている。

「あの…」

なんぞ？

「ありがとうございます…」

「さて。何のことかな」

うつむいたままのアリサちゃんからお礼を言われたけど、ね…。べ、別に、アリサちゃんのためにやった訳じゃないんだからね！

そんなことを考えていると、タツミが立ち上がった。やれやれ、お説教は終わりかな？

「さてエリック。お前には後で反省文五枚な。来週までにツバキさんに渡しとけよー」

「げ」

そんなにもこいつ、僕がヒバリちゃんと仲良くしてたのが気に入らなかつたのか…。くそ、なんてやつだ。

ブツダシツト！

ブレンも『やれやれ、タツミも甘いな…。』みたいな顔してるんだ！こいつは私情で人に反省文を書かせようとするやつなんだぞ！

この後めちやくちや医務室行った。

ソーマにリツカちゃん、サクヤさんにジーナさんが様子を見に来てくれた。ソーママジヒロイン。

数日後。自室にて。

僕の目の前にはまっさらな反省文五枚。期限はあと数分後。

「…」

僕は引き出しからマッチを取りだし、くるくる筒状に丸めた反省文の下に火を着けた。

そしてくるつとひっくり返し、簡易松明の出来上がり。

「燃ーえろよー燃ー〇ーろー…♪」

などと適当な歌を口ずさみながら、金属の灰皿を探す。

それを机の上に置き、丸めた反省文を入れれば…。

ミニキャンプファイヤーの出来上がり。

「マ〇ム〇イムマ〇ム〇イム、マイムエツサツソ」

懐かしいっすねえ…。

無事にキャンプファイアが終わり、灰皿に灰がきれいに入っていることを確認したら、部屋を出よう。

…さーて、何か任務でも行こうかな…。

ロビーに出てヒバリちゃんに近付くと、ヒバリちゃんから声を掛けられた。

「あ、エリックさん！ツバキさんがお待ちです。至急、ツバキさんの元に向かって下さい！」

「ヒバリちゃん、何か任務はあるかい？」

さて、ここはさらっと流して任務に行きたいところだが…。

「ツバキさんがお待ちです。至急、ツバキさんの元に向かって下さい！」

「や、任務…」

「至急、ツバキさんの元に向かって下さい！」

「…はい」

ヒバリちゃんには勝てなかったよ…。

どうでもいいけど、『みさ〇らなんこつ』を『みさくら〇んこ〇』にすると、なんだか猥褻な感じがする…。しない？フィーヒヒヒ！激しく前後スツゾオラー！

などと馬鹿なことを考えながら、僕は仕方がない、とぼとぼとツバ

キ女史の元へ向かうことにした。：反省文はもう燃やしちゃったけどね!

「遅い!既に提出の締め切りから五分以上遅れているぞ!」

「遅くなってすみません」

遅くなったことは謝る。だって僕が悪いし。

「はあ…。まあいい。」

それで?反省文はどこだ。貴様は何も持っていないようだが…」

「燃えました」

これから毎日反省文を焼こうぜ!

そう答えたとたん、ツバキさんの形のいい眉がピクツと動いた。ひえっ、美人が怒ると怖いって本当やったんや…。

「…今、なんと言った」

「燃えました」

「…貴様、よほど厳罰化されたいようだな」

なに!?厳罰化だと?

「謹慎処分ですか!?!」

「目を輝かせるな…まったく」

(これではあいつらから刑罰の軽減を嘆願された、などとは言えんな…)

なんだ、違うのか。せつかく堂々とサボる口実が出来たと思ったのに…。残念。

「それでは、貴様に対する処罰を言い渡す。」

今週中に、シユウ、グボロ・グボロ、クアドリガ、コンゴウ、そしてヴァジュラを討伐すること。それが終わり次第、博士の元へ報告に行け。

…それ、準備出来次第出撃しろ」

「了解です、上官殿。」

…博士からの依頼ですか?」

ちよつと気になる。やっぱりシオ関連だろうか？

「それを貴様に言う必要はない。分かったな」

「…わかりましたよ」

そう言つて、僕は肩をすくめた。

…つと、そうそう。ツバキさんには言つておかなきゃいけないことがあるんだよね。

「ツバキ女史」

「…何だ？」

「いざというときには…、腹を括つてもらいますよ？」

絶対に、その時は来る。自分の考えをもつて、行動しなければならぬ瞬間が。

そう思つて言つた言葉だったが、ツバキさんには笑われてしまった。

「…見くびるなよ、若造が」

「そうでした。」

…それでは、僕はこれで」

僕は僕の相棒を取りに、部屋を出た。

「…フン」

誰も居なくなつた部屋で一人、さきに言われた言葉を反芻する。

「いざというときには腹を括れ…か」

ふと、上を見上げる。あやつには見くびるなど返したが…。

私はその時が来たら、あいつのように強く在れるのだろうか？  
「リンドウ…」

## ルツピヨロ専用ヒギヨパム

「ふんふんふん♪」

おはこんばんにちは。上田です。

今日はちよつと機嫌が良い。というのも、実は今日はちよつと久しぶりにジーナさんと二人きりでの（戦場）デートなのです。

え？戦場のクリスマス？はは、なんのことやら。まつあきも猿のお面もワニキャップも、儀式とやらも私は何も知りませんよ？本当ですよ？

さて、そんなわけで早速エレベーターに向かーー。

「…エリック。ちよつと良いタイミングだ。

支部長が俺たちを呼んでいる、さつさと行くぞ…」

え、ちよつと待って下さいソーマさん。

絶対それ厄介事の気配がするんですが。

最近周りからのぶしつけな視線でじろじろ見られてるなー、って思ってたから、今日のジーナさんとのデートは本当に僕に取って貴重な癒しなの。ねえ。

ソーマ待って、止めて引きずらないで。いや、ああああああ…。

上田は速やかに支部長室に回収されていった。

支部長室。

ゲンドウポーズをする支部長。フードを被ったまま腕組みをしているソーマ。そして引きずられた挙げ句に入室してすぐにぽいと捨てられた上田。僕です。

「…」

「…」

「…」

上から順に、微妙にひきつった顔をしている支部長、いつも通りのツンツンソーマ、しぶしぶと立ち上がる上田。あー、かつたるい…。ジーナさんの居ない極東とかさ、カスタードのないシュークリームみたいなもんだよ？やる気失せますわー…。



「…さて、では話をするとしよう。」

最近、アナグラの中があまり和やかな雰囲気とは言い難いことになってきているようだね…。エリック君?」

そういう支部長は皮肉気にこちらを見やる。が、大体コイツのせいな黒幕にそんなこと言われましてもね。

「はあ」

「…アリス君といい、君といい、少々言動には気を付けてほしいものだね。…まあいい。」

さて、今回二人を呼んだのは他でもない。

ソーマには既に手伝わってもらっているが、エリック君。君にはソーマと共に、『特務』と呼ばれる任務についてもろう」

「何…!?!」

支部長の言葉に、ソーマが支部長を睨み付けながら聞き返した。え、なんかおかしいところあった?

「てめえ…、何を考えてやがる…」

「…特務とは、簡単に言えば少々手強いアラガミを君たちに倒してもらう任務となる。それと、特務については他言無用だ。」

それ故、しっかりとした報酬をこちらにも用意させてもらう。…何か質問は?」

「無視してんじやねえ…!」

「…報酬の内容は?」

「相応の素材と金額、それに配給チケットを確約しよう」

「エリック…、てめえもだ」

「ごめんソーマ、後で聞くよ。」

…休暇が減らされるのであればお断りします」

「休暇についても問題はない。代休、という形にはなるが…。こちらも、君たちにはしっかりと休んでもらい、特務を必ず遂行してもらいたい。」

さて、それではまた用があればこちらから呼ぶ。

…二人とも、下がりましたまえ」

「では、失礼します」

「チツ…」

そう言つて、僕ら二人は支部長室を出た。

互いに無言でエレベーターに乗る。…ソーマ、怒ってるなあ…。

「…という訳で、よろしくねソーマ」

「…」

無視されたでござる。

うーん、でもなあ。支部長に呼ばれるってことは支部長に目を付けられたってことだし。つまりそれなら下手に反抗してアンブツシユ（不意討ちのこと）されるよりは、しばらく大人しく言うことを聞きながら様子を見た方が良くと思うんだよね。

それに、しばらくすればゲームでは主人公も特務やる訳だし、ユウ君、ソーマのどちらかとも一緒なら生存率はぐっと上がる。

むしろ最悪なのは、一人で特務に行かされるカリンドウみたいな暗殺みたいに葬り去られるかだからね。それならまだ今回みたいにしておいた方が良く。

決して休暇が減らない上に配給チケットが貰えるなら、と報酬に釣られたりした訳ではない。それだけは真実を伝えたかった。

僕やソーマの部屋のあるベテラン区画と呼ばれる階に着くなり、ソーマは無言のまま行ってしまった。

…あれ？これ、孤立するフラグ立った？

## 強いモノ、弱い者

「クソツ……」

迫りくるヴァジュラの剛爪を必死に転がって避ける。既にこちらはボルグ・カムラン、シユウを倒した代わりに満身創痕だ。今なおソーマが必死に巨大なバスターブレードを振りかぶって戦っている後ろ姿を視界の端に捉えつつ、こちらを執拗に狙ってくる猫公ヴァッシュユラから全力で身を捻って回避する。

僕とソーマがこの、赫かくとした灼熱の戦場、煉獄の地下街に入ってから、既にかかなりの時間が経過している。

初めのうちはグボログボロー一匹とかくらしいの簡単さだった特務だが、シユウとコンゴウ、グボロとクアドリガ、ウロヴオロスと、ジヨに強くなってきた、今ではもはや三体同時が当然のようになってしまった。

28型ガットになり、ようやく危険度5、つまりゲーム的には難易度5に耐えられる程度（余裕になる訳ではない）になったと思つたのも束の間。最近ではジーナたんとの戦場デートも出来なくなり、ソーマに何度も何度もリンクエイドしてもらうような始末。

あまりにもキツイ任務ばかりが休みなく来るようになり、最近ではもはや自分がソーマの足を引っ張っているだけのように感じ始めている。

端的に言えば、余裕がない。それも、まったく。

息をきらせながら無様に走り回り、それでも避けきれずにアラガミに囲まれて地面に這いつくばったことはもう数えきれないほど。

そうして逃げ回っていると、不意にグオオオオオ……！

という叫び声が聞こえてくる。そして慎重に周りを見渡すと、服のあちこちに汚れと破れのあるソーマがゆっくりとこちらへ向かってきていた。

ああ、まただ。

「終わりだ。帰るぞ」

そう一言だけ告げて、こちらに背を向けるソーマ。

初めのうちは、死にすぎだとか、周りを見ろと言ってくれていた  
ソーマも、最近はめつきり話をしなくなっていた。

無力。

そう。僕は無力なのだ、やはり彼らと僕は違うのだと。第一部隊

そう、実感させられる。

ソーマが僕に何も言わなくなったのは、僕が死なくなつたから  
じゃない。

ソーマが僕に何も言わなくなったのはきつと、僕が居ても居なくて  
も同じような状態だからだろう。

暗い色のフードをソーマと同じように被りながら、僕は彼の後を  
追った。

スコープを覗く。

スコープの向こう側にいるアラガミの顔がこちらを向き、目が合っ  
たその一瞬。

私の指が寸分違わぬタイミングでトリガーを引き、アラガミに全て  
命中する。その瞬間、横から来たタツミがショートブレードで斬りか  
かり、アラガミは鳴き声をあげながら地に倒れた。

今日は第一七外周部の哨戒任務中に、はぐれのヴァジュラと遭遇。  
最も近くの戦闘可能地域である、贖罪の街にヴァジュラを誘導し、  
タツミ、ブレンダン、私の三人のチームで討伐した。

ヴァジュラが完全に動かなくなつたことを確認して、ふう…と息を

つく。

ダメね……。以前であれば、こういった一瞬の命のやり取りには興奮を覚えたものだけだ。

最近……。というか今は、なんだか心から感じる事が出来ない。

なんとなく胸の奥がモヤモヤとするというか、ほんのわずかにチクチクとする不快感。

考えてみてもその原因が分からず、モヤモヤとする悪循環。

ハア……。と、ため息をついていると、今回のリーダーのタツミがヴァジュラのコアを抜き取ったのか、こちらへやって来た。

「ジーナ、お疲れ。今日も良い狙撃だったぜ」

片手を挙げながらニツと笑いながらこちらへ近付いてくる彼には、私を励ますような感じはなかった。ただ純粹に、今日の援護も良かったと言いたいのだろう。

タツミやブレンには分からない程度のものなのだろう。

ふと、最近エリックと話をしていないことに気付いた。

彼と話をしなくなってから、世界の色が抜け落ちている気がした。

何気なく空を見上げて、常と変わらない蒼穹があるだけだった。

以前と同じはずの世界は、以前よりも色褪せて見えた。

アナグラに戻り、自室のベッドにドサリと倒れ込む。

なんとなく無気力だった。

神機の整備はリツカに任せてきた。彼女なら間違いなくちゃんと戦えるようにしてくれるだろう。そういう信頼があった。

ふと、腰に付けていたポーチを探る。

忙くなってきていたエリックが、以前くれた配給チケットがあったはずだ。

何とはなしに探してみるも、なかなか目当ての感触がしない。ごそごそと探していると、コロツとバレットが出てきた。

何気なく手に取って、部屋の照明にかざしてみる。

以前、カノンと共に作ってみた、カスタムバレットだった。

：本当は、<sup>エリック</sup>彼に使ってみせてから、せいぜい勿体ぶつて渡すつもりで作ったものだ。

どんな反応をするだろう、なんて。そんなことを考えていた。

ブラスト用の、特別製。

エリックの神機はリツカいわく、ブラストになっているけどショットガンでもある、良く分からないものらしいので、オラクルリザーブというのが出来ないみたい。

なので、何とかエリックでもちやんと撃てて、かつ破碎属性の大きい組み合わせを工夫して作ってみたのだけれど…。

腕が怠くなってきたので、腕の力を抜く。ドサリとベッドに乱暴に落下して、だけど私の手はカスタムバレットを握り締めていた。

## 揺れる心、震える拳

どうしても上手くいかない。

これまでの実戦の経験、ゲームの知識と経験から何とか誤魔化してきたが、さすがにそろそろ限界だ。

今使っている28型ガットはランク4。そして今僕とソーマが当たることになっている特務は危険度5から6。

危険度5まではまだなんとか出来た。たまに一撃で体力をぐっすり持っていかれて落ちることはあっても、ほとんど稀な程度だった。

それが最近では、危険度6でほとんどが同時討伐のミッションばかりだ。当然、乱戦になりやすいなんてものじゃない。大した音じゃなくてもすぐに気付かれる。クアドリガやコンゴウといった、聴覚の優れたアラガミは当然として、シウウやグボロ、ヴァジュラやボルグ・カムランあたりもすぐに寄ってくる。

そうすると、シールドのあるソーマはともかく、ブラストオンリーの僕はアラガミの移動やその場での身動きでも体力が減る。地味に痛い。

じゃあ武器を強化すればいい。そういう結論になる訳だが、28型ガットを強化するには墮鳥砲、墮猿面、墮龍角が必要になる。

そして特務では、まるでそれらだけ避けられているかのように、シウウ墮天やコンゴウ墮天はいない。

初めは偶然かと思っていたが、クアドリガ墮天やマータとは既に戦っている。やはり意図的に避けられていると見るのが自然だろう。ただひとつ分からないのは、何故それらだけ避けられているのか。当然なんらかの理由があるのだろうが…。そのせいでこちらは深刻に悩む事になっている。文句のひとつも言いたくなるものだ。

そんな風に考え事をしていたからか、エレベーターから出てきた人と軽く肩がぶつかった。

「つ…と、すまない」

「…あん？」

顔を上げて見てみると、カレルとシユンだった。今の感じからして、シユンにぶつかってしまったようだ。

カレルは僕よりも背が高い。逆にシユンは僕よりも小さいので、シユンを見ると自然、少し下を見る形になる。

「おいおいエリック、まさかぶつかってきてそれだけじゃないよな？」  
シユンが胡乱げな顔をして少しこちらを見上げて言う。この二人は僕とは合わないから、あまり長々と対応したくない。なんていうか、自分勝手なところがあるのだ。

だからこういったことを言うし、平気です。シユンに至ってはノルンのデータベースにすら協調性に難がある、と書かれていた。だから嫌いなんだ…。

特に言うこともなかった上に、今僕はあまり機嫌がいい訳じゃない。だから黙って眉をひそめていたが、シユンはそんな対応が気に入らなかったのか、吐き捨てるように言った。

「はっ、だんまりかよ」

「そーいやエリックよお。最近忙しいみたいじゃねえか。なあ？」

けどおかしいなー、お前最近全然討伐数増えてなかったよな？なにしに行ってるんだ？ピクニックか？」

隣に居たカレルが、ここぞと調子に乗って喋り始めた。人の討伐数を眺めている暇があれば、ミッシヨンに行けば良いだろうに。そう思う。

「ははっ、ピクニックかーそりゃいいな！」

あれだろ？怖い大型犬に追いかけて、助けてーって情けない声をあげながら惨めに逃げ回ってたんだ！」

「はははっ、そうそう！無様な姿を晒してよお！」

ギヤハハハ、なんて品のない笑い声をあげながら話している二人。もうこれ以上付き合うのはごめんだ。

「…用件はそれだけかい」

そう言うと、馬鹿みたいに笑っていた二人がこちらを見た。水を差されたと言いたげな表情だが、不愉快なのはこっちだ。さすがに我慢の限界だ。



すると、突然カレルがニヤリと笑ってこちらを見た。何だ。

「おっと、もう少しくらいいいじゃねえか。なあ？お兄ちゃん？」

カレルがそう言うと、シユンがカレルに聞き返した。

「お兄ちゃん？」

「ああ。なあエリック？お前さん、かわいいかわいい妹が居るんだろ？」

ニヤニヤと。悪意をむき出しにした嘲りの表情でカレルが言う。するとシユンは何か思いついた、とでも言いたげな表情をした。

「エリックの妹か。そりゃ、さぞかしかわいそうになあ…。」

なんてったって、こんな情けない兄貴がいるんだからよ！

「いやいや、わかんねえぜ？もしかしたら、妹さんはそれ以上かもしれないからねえからな」

「あー！さすがカレル、あつたまいいな！

エリック以上に惨めに泣き叫ぶのか！お兄ちゃん、つてなあ！ハハハハハハッ！」

視界が赤く染まる。

気付いた時にはシユンの胸ぐらを掴み上げて、持ち上げていた。

「がっ…！」

「…僕のこととはどれだけ言われても構わない。

だけど。それ以上、妹のことを悪く言うのは止めて貰おうか…！」

シユンの足は既に地面についておらず、僕の右手を引き剥がそうと躍起になっている。

今の僕の手を、そう簡単に剥がせると思うなよ…！」

「離せよ…っ！」

シユンがジタバタしている。その憎々しげにこちらをみるシユンの顔を、僕は睨み付けた。

すると、さすがに慌てたのか、カレルがこちらをなだめるようにゆっくりと寄ってきた。

「あー、すまんエリック。悪かったよ。

とりあえず、シユンを離してやってくれ」

カレルの表情はヘラヘラとしたもので、実に彼の言葉の薄っぺら

さが伝わってくる。

「君は黙っていてくれないか」

カレルの方を一瞥するが、すぐにシユンに視線を戻した。まだ僕は、彼から妹のことを悪く言わないと言われていない。

「くっ…そが…」

心底不快そうにこちらを見るシユンだが、彼の顔を見るたびにこちららは腹の底から怒りがわいてくる。

以前の時にタツミに言われているし、頭では抑えろと、抑えないといけないとわかっているが、それでもやはり手に力がこもる。

「…悪かった！もう言わねえよ！だからさっさと下ろせてんだ！」

ドン、と突き飛ばすように手を離す。ドスツ、という音と共に、シユンが倒れるようにして座りこんだ。

「つてえ…」

「さっきから騒がしいけど、一体何してるの？」

涼やかな声が後ろから聞こえて僅かに驚いた。後ろを振り向くと、サクヤさんが不思議そうな顔をして立っていた。

「あー、なんつーか…」

右後ろからカレルの焦ったような、気まずい感じの声があった。

とはいえ、ここで何があつたか正直に言ってしまうと僕が後でタツミの説教と反省文を書かされることは目に見えて明らか。

仕方ないので、助け船を出すことにした。

「ああ、最近僕が切羽詰まっていますね。」

あまり余裕がないのはダメだぞ、と言われていたところだったんだ。

あまりに騒がしかったのなら謝るよ」

そういうと、サクヤさんは怪訝そうにしながらも、一応の納得はしてくれたような表情をした。

「そ、そうそう！」

じゃ、そう言うことで。俺らはもう行くから！」

そう言って、シユンはそそくさとカレルと共に自分たちの部屋に戻っていつてしまった。

さて、僕も逃げるか。

「それでは、僕もこれで」

「あ、ちよつと！」

サクヤさんの声に背を向けて、さっさとエレベーターに乗り込んだ。  
だ。

まったく…。という声が聞こえた気がしたが、気のせいということにした。

## 雨

エリックが帰ってきた。

いえ、実際には帰ってきた、というよりは、居ることが実感できた、という方が近いのでしよう。アナグラに居ることは分かっていたけれど、ここのところ、顔を会わせることがなかったから、久しぶりにエリックが帰ってきたような感じ、というだけね。本当に、久しぶりにだからなのか、エリックは少し疲れたような顔をしていた。：ちよつと痩せたかしら。

まあ、それでも私の顔を見た途端、今まで通りの表情になったから、私の気のせいかもしれないわね。

：今まで通りじゃないのは、むしろ、私の方。  
エリックに顔を見ているだけで落ち着かない。何となく、心がざわざわするような、そんな気がする。

この感じは、何なのかしら…。

今日の標的は、エリックの神機の強化のため、シユウ墮天、コンゴウ墮天、グボロ・グボロ墮天。：グボロは氷が効くからエリックの28型ガットでも大丈夫だとして、コンゴウは私がメインに動いた方が良さそうね。

まあ、そうは言っても。結局は。

ゆっくりとまぶたを開く。広がる視界。いつものように雨の降る平原に、常に消えない竜巻。

「……………ふふっ」

いつも通り。命の奪い合い。その瞬間、刹那がいとおしい。  
さあ、狩りの時間ね。

あ、言っておくけど、私の胸を嘆きの平原とか言った奴はコロス。

雷撃。雷撃。雷撃。

素早い動きで翻弄するように、流れるように空を翔ぶ。

そんなシユウの様子をスコープから覗く。さあ、あなたの命と私の命のやりとりをしましょう。

そう思いながら引き金を引く。

ああ、何度やっても、この瞬間が堪らなくゾクゾクする。

一瞬の後、弾丸がシユウの頭部を弾き飛ばす。運良く結合崩壊を起こしたみたいね。

シユウが頭を押さええているうちに、バコバコとシユウの全身を爆発系のバレットが撃ちすえてゆく。

…今日のエリックは、今までよりもやけに苛烈。正直、シユウに嫉妬してしまいそうなほどに。

全然効いてないみたいだけど。

ふふ、いつまでも恍惚としてないで、私も私の仕事をしましょうか。

ああ、願わくば。

いつまでも、こんな時間が続けばいいのに。

倒れたシユウから視線を離さず、じつと見つめているエリックに歩み寄る。既に帰投のへりはこちらに向かっているらしいから、しばらくの待ち。

「…どうしたの」

エリックの横顔は、いつもよりなんだか精悍で。それでいて、張り詰めているみたいだった。

「…いや」

そう言つて、エリックは神機を肩に担いで空を見上げた。雨の降る、暗い空を。

「なんでもないさ。なんでも」

そう言つて彼は私に背を向けて歩き出した。

その背中が、いつか消えそうな気がして。

私はたまらず、駆け足でその背中を追った。

## 時雨

ひゃっはー！久方ぶりのジーナたんのデートだひゃっほ  
おおおおう！

最近はおーマに嫌われ、というか拗ねられつつ難易度6のアラガミ  
たちと戯れ（比喻）、大きな猫ちゃん（ヴァジユラ）を可愛がり、時に  
可愛がられ（隠喩）、疲労困憊のなか仲間内ではっちやけて（カレルと  
か）、いやあ実に楽しかった（皮肉）。

嘘です疲れまくってました。死ぬかと思った。いやマジで。

さすがのエリックボディでも難易度6にランク4武器は辛すぎる。  
ああいや、マスクドオウガになるエリックの身体って、むしろ弱かつ  
たりするのか？（・・・）

ま、まあそのかわりというか、最近神機が手に吸い付いてくるくら  
いになってきたから良しとしよう。今日もリックカに整備して貰おう  
と渡そうとして、やけに離れないなーと思うくらいにぴったり来てた  
し。ぴったんこカン★カン？安住アナ大人気だよね。僕も好きだよ。  
まあアナグラに来てからはずいぶん見てないけどね！というか見  
れないし。

とはいえ、悪いことばかりでもない。

コウタに頼めばバガラリーは見せて貰えるし、父に頼めばそれなり  
に娯楽品も流してもらえる。妹のエレナが不自由しないように頼ん  
でいる以上、これ以上頼むことはなかなかないが。

それにしても、我が神機ながら最近思うことがある。丸みを帯びた  
フォーム。間抜けな銃口。パツとしない色合い。

…ダサイ。

しかも最近はお汚れが落ちないのか、なんか黒ずんで来ているような  
気がするし。

やー、やっぱ早いうちに強化したいなー。

ジーナたんのデートで少しづつ墮鳥砲とか墮猿面とか墮龍角が  
集まってきたてはいるものの、クロモリ鋼が出ないんだよね…。

物欲センサー恐るべし。

そういえば最近、ずっと支部長に苛められてたからわからないんだけど、今原作のどのあたりなんだろう？

この前アリサが（仕方ないとは言え）ボロクソに言われていた時につつい上田パーンチ！してしまったのは覚えているんだけど…。

あれはたしかアリサ復帰のタイミングくらいのはずだから、多分最近ユウ君とかと一緒にミッションとかかな？多分。多分（うろ覚え）。

だとすると、次は…なんだっけ？

わからないままうんうん頭を捻っていると、声を掛けられた。うん？この声は…。

廊下を歩いていると、うんうん唸っているエリック馬鹿を見つけた。

…ふむ。最近めつきり姿を見なくなったのが支部長に呼び出されてからだったから、支部長にバレたのかと思って心配していたが…。杞憂だったか。

「そんなところで何をしている」

あまりにもうんうん唸っているので、声を掛けるか少し迷ったが。結局、こいつもアナグラの仲間なのには変わらない。

それに、リンドウのためにいろいろやってくれたりもしたようだしな…。

声を掛けられたことに気付いたのか、ひよいつと顔をあげてこちらを見たエリックの顔は、やはりどこか間抜けっぽかった。



ただ。

「お前…少し痩せたか？」

そう思う程度にはやつれているようだった。草臥れた雰囲気、とてもいのか。

ちゃんと飯くらは食べているのだろうか。

「ああ、ツバキさん。お久しぶりです。

まあ、最近いろいろあります…」

そう言っつてフアサツ…と前髪をかきあげるも、やはりどこかその姿には覇気がない。

「まあ、誰にしても何かはあるだろうさ。ただ、しっかり食え」

つい、そう言っつてしまうくらいには。

「ええ、ありがとうございます。

…そういえば、アリサの様子はどうです」

そう言っつた時には、キリツと引き締まった表情をしていた。…少しは良い顔をするようになったか。

とはいえ、アリサのことは今いろいろと微妙かつ複雑なところだ。デリケートな扱いが必要になるくらいには。

「…本人は前向きに動き出している。お前もあまり派手に動かずに見ていてやってくれ」

以前、アリサのことを悪く言っつていた二人と暴力沙汰になったのは既にアナグラ中に知れ渡っつているところだ。あまり派手な、というか普通に暴力沙汰はやめてほしい。

そう言っつと、うげつ、と言わんばかりの顔をした。…反省は一応しているのか。

「あれは、まあ…その…はい。まあ…」

ふっ。

思わず笑みがこぼれる。

真っ直ぐなところは、嫌いではないがな。

「ああ、そうそう。

リツカがお前を呼んでいた。後で顔を出しておけ」  
そう言っつて、エリツクの隣を通り過ぎた。

まったく、世話にかかる。

## 神の色

神機整備室。

楠リツカは、神機のオーバーホールをしていた。

彼いわく、「のっぺりしてダサイ」らしいけど、リツカは気にならなかった。

彼女にとって、神機とは全てかわいい子たちであり、仲間だから。

整備台の上に固定された銃身とは反対に、取っ手棒側のカバーから弾倉、極太のボルトにしか見えないエジクタロッド、カバーに隠された撃鉄まで、綺麗に分解されて銃身の反対側に固定されていた。

「ふう」

額に垂れた汗をぐいっと無造作に手首で拭い、リツカは一息ついた。手袋ごしなので額が少し汚れたかもだけど、もう顔に油污れは常のことだから気にしない。

両サイドについたウエストポーチからナットと柔らかい布を取り出し、更にバラしていく。

(この子の整備も、久しぶりなんだよね)

以前はよく顔を合わせてはちよつとした話をするが多かったのに、最近は出撃ばかりしてた。

(ふう)

ちよつと不機嫌。この子に当たっても仕方ないとは思いつつ、でもやっぱりエリックさんが悪いんだから仕方ない。そう、仕方ない。そう思いながら分解を進めていく。

(……………)

パツと見た時から分かった。

この間まではアラガミの強さと釣り合いの取れたミッションをしていたこと。

相変わらず、ブラストのこの子に合わないレーザー系のバレットを多用していること。

また最近、格上のアラガミを相手に無茶な連戦をしていること。

ダメージコントロールはおろか、自身へのダメージすらどうにも出

来ていないこと。

氷雪系のバレットばかり撃っていること。

(…まったくもう)

理解はしてる。

こうやって、頑張ってくれているから私たちは今も無事に生きてる。

それでもやはり、無理はしないでほしいと思う。

銃口は酷く損傷してる。この子に合わない氷雪系のバレットをかなり連発して、銃口はもはや歪で黒々としている。

銃身そのものが黒っぽく変化しているのはちよつと、いやかなり不気味だけど、なんとなく悪い変化じゃなさそう。

それより問題は、神機全体のダメージ。

ひどくバラバラのダメージレベルで、一番酷いのは最も地面にぶつかりやすい弾倉底部。

損傷の具合からして、エリック自身が何度も何度も地面に叩きつけられてることが分かる。その傷が治癒するよりも前に。

(吹き飛ばされたんだろうなあ)

そつ、と銃身を撫でる。この子も、エリック自身も、きつと、死に物狂いで駆け抜けた。そして帰って来た。

我慢するように。優しい瞳で眺めながら、きゅつと手を握る。

一つ、息を整える。

そして再び両手を動かし、弾倉を更に分解していく。

底部に損傷が多いので、修理と補強をすることを決め、頭の中でメモしておく。

ヴァジュラ種の突進。自身がダメージで膝を着いた時の衝撃。ロボロに傷付いた状態でのモルター弾の連発。弾倉の表面から内部まで、今のこの子が何があつたかを鮮明に教えてくれる。

本当はこの弾倉を大きく出来ると良いんだけど、それはこの子達には絶対に出来ない一線みたいで、この子達が問題のない増強をする必要がある。

リンク・サポート・デバイス。その雛形概念が誕生する、少し前

の話である。

取っ手部、そしてカバーは最も損傷してた。

だけどそれは片側だけで、それはつまり神機でとっさに身体を守りながら戦ったってこと。

以前のエリックはここが傷付くことはなかったから、良い使い方を  
するようになってるみたい。

(成長してるなあ)

エリックに限らず、誰かの神機を見て成長を実感すると、私も嬉しい。

停滞を続けている人は、生き残るのが難しい、というのもあるけれど。やっぱり、残されるのは辛いから。

神機にも個性がある。

この子は炎のような女性のイメージだし、他にも厳しい女性のようなタイプの子、荒々しいささくれだった危ない感じの子、騎士の女性のような子、健気でおとなしい子とか。

エリックは滅茶苦茶に使ってるし、相変わらずレーザー系のバレットばかり使う悪癖は治ってないみたいだけど、前よりは炎系のモルター弾をちゃんと使うようになってきてる。

うんうん。お姉ちゃんは嬉しいです。

でも、もうちよつと優しく取り扱ってくれるように、少しだけ取っ手側を詰めておこう。エリックの身長と手の大きさ、体格だと、ほんの少しだけ短い方が取り回ししやすいと思うし。

撃鉄は無事。

カバーの損傷がその分ひどく見えるけど、このカバーはかなり丈夫だし、滅茶苦茶なりロードとかはしてないみたい。

前からエリックは、ロードだけは無理はしたことが無かった。この子の一番大切に、慎重に扱わなきゃいけないところは分かっているだね。

もう少しだけでも、優しく取り扱ってくれれば良いんだけどなあ。